

川崎大師教学研究所紀要・第10号抜刷
令和7年3月21日発行
川崎大師教学研究所

仏教のタントラ化におけるシヴァ教の役割

1. ダルマキールティ、シャーキャブッディ 時代のタントラの諸伝統

アレクシス・サンダーソン
(種村隆元 訳)

仏教のタントラ化におけるシヴァ教の役割

1. ダルマキールティ、シャーキャブッディ時代のタントラの諸伝統¹

アレクシス・サンダーソン

(種村隆元 訳)

本論文のメインタイトルに告知されている研究には2つの目的がある。一つ目は、特定のシヴァ教 Śaiva の諸伝統が、インド中世初期における大乘仏教のタントラ的変容のモデルとして果たした役割に関する私の見解の概要を述べることである。二つ目は、この変容の原因と、その変容の道筋が直線的ではないことの原因に関して、試験的に仮説をいくつか提示することである。本論文では、番号を付したサブタイトルが示すように、シヴァ教および仏教のタントラの諸伝統が7世紀までに到達した状況について、どのようなことを述べることができるかを考察することから始めることにする。この時期は同じ7世紀後半に大規模なタントラ化が始まり、その後そのタントラ化が加速する直前の時期に当たる。

シヴァは約紀元前1世紀ごろから物語の中で仏教文献に登場し始める。ここでは、人々が息子の誕生や降雨といった世間的な利益のためにシヴァ神や他の神々に祈る姿が描かれている²。しかしながら、これらの初期の言及においてシヴァへの敵対心を表すものはない。すなわち、仏教との摩擦を引き起こすような救済的な誓戒の体系をシヴァ教がすでに作り上げていたこと

¹ 本論文は第56回日本密教学会学術大会（2023年10月）における基調講演を拡大させたものである。『密教学研究』寄稿用に論文化を試みたところ、講演において取り扱った範囲を1本の論文として取りまとめることが不可能であることが判明した。したがって、私はこの論文化の作業をいくつかの段階に分け、『密教学研究』第56号にはそのうちの最初の部分だけを寄稿することとした。日本密教学会には学術大会における講演と『密教学研究』への寄稿を招待していただいたことに謝意を表したい。

² シヴァ教の最も古い証拠の簡略な概説については SANDERSON 2013, 219–223 頁を参照。

を示唆するものは何もない。私が知る限り、このような敵対的な観点からシヴァ教が表現されている仏教側の最初期の証拠は、『大集経』(412年から426年の間に曇無讖他により初めて漢訳されている)の『宝星陀羅尼経 *Ratnaketuparivarta*』である³。『宝星陀羅尼経』は、邪悪なマールがシヴァの姿を取りブッダの前に現れ、ブッダが覚りへの道を捨て、その代わりにシヴァの道に従うように説得するも失敗に終わるというエピソードを含んでいる⁴。ここにシヴァ教の興起に対する敵対的な反応の始まりが見られる。そしてこの敵対的な反応は、金剛手が降三世という忿怒尊の姿を取り、シヴァ／大自在天 *Maheśvara* を制圧し、殺すという神話や図像において最高潮に達することになる。この物語は7世紀後半あるいは8世紀初頭に編纂された仏教の「ヨーガタントラ *Yogatantra*」である『真実摂経 *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*』中の物語として整えられ、その関連文献にいくつかのヴァリエーションがある。さらに、後続する仏教の「ヨーギニータントラ *Yoginītantra*」、就中、ヘールカ・チャクラサンヴァラ *Heruka Cakrasaṃvara* の経典群において、この忿怒尊が仰向けになった、シャークタ的シヴァ教の高位の尊格であるバイラヴァ *Bhairava* とチャームンダー *Cāmuṇḍā* /カーララートリ *Kālarātri* を足の下に踏みつける姿で観想され、描かれることになる⁵。

5世紀初頭に『宝星陀羅尼経』が漢訳される頃までには、シヴァ教の苦行者たちは碑文の中に明確に記録されるようになってきている。そしてそのことは、この頃までに、仏教諸教団の繁栄に対して脅威を引き起こす程に庇護の対象となってきたと言えることを意味している。6世紀にはタントラのシ

³ 大正 397。本文献は 629/630 年あるいは 627 年にプラバーミトラ *Prabhāmītra* (波羅頗蜜多羅) により再度漢訳されている。

⁴ *Ratnaketuparivarta* ed. KURUMIYA (久留宮圓秀) 1978, 6-7 頁。

⁵ *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*, 上巻 315-421 頁, 下巻 342-346 頁, 356-358 頁を参照。他の当該資料については、IYANAGA 1983, 750 頁 b3-26 および IYANAGA 1985 を参照。ヘールカ・チャクラサンヴァラがバイラヴァおよびチャームンダー／カーララートリを踏みつけることについては、SANDERSON 2009, 231-232 頁を参照。

ヴァ教の主流の教団的な基礎を成り立たせる修道院の伝統が存在しており⁶, また, 7世紀にはシヴァ教の入門儀礼は, タントラのシヴァ教の司祭が必要とされるほど定期的にその開催の需要があるような儀式になったという証拠がある⁷. このような需要は, 司祭たちが1年の決まった日にこの入門という目的のための定期的な儀式を開催するための布施を受け取る条件の一つである. 更に, 王たちがタントラのシヴァ教の入門儀礼 (ディークシャー *dīkṣā*, シヴァマンダラディークシャー *śivamaṇḍaladīkṣā*) を受けたという最初の記録を見いだせるのも7世紀のことである. 以後, この王の入門という実践は, インド亜大陸と東南アジアのクメールの統治者の間で広まっていくことになる⁸.

ダルマキールティの言及するシヴァ教入門儀礼, ダーキニータントラ, バギニータントラ

タントラのシヴァ教が論駁に値する宗教として認識されるようになったことは, 仏教哲学者ダルマキールティ Dharmakīrti (550年～650年にその活動時期が収まる⁹) が, 解脱はシヴァ教の入門儀礼によってのみ得られるというこれらのシヴァ教徒たちの主張に手間をかけて非難することに見ることが

⁶ SANDERSON 2013, 235–236 頁を参照.

⁷ SANDERSON 2013, 237–239 頁を参照.

⁸ SANDERSON 2001, 8–10 頁, 注 6 を参照.

⁹ FRAUWALLNER (1961, 137–141 頁) は, ダルマキールティの生存年代はおおよそ 600 年から 660 年であるとする. TILLEMANS 2000, xiii–xv 頁は, 彼の哲学的活動が 6 世紀後半まで遡る可能性を除外する積極的な証拠は挙げられないことを指摘している. DELEANU 2019, 24–390 頁は, 彼の生存年代が約 570 年から 640 年であるとする. KRASSER 2011 は, 彼は 550 年頃に活動していたと主張する. しかしながら, ダルマキールティがこのように早い年代に活動していたことに関して鍵となる KRASSER の議論, すなわち, パーヴィヴェカ (約 490–570 年) がクマーリラより年代が下るということは, KATAOKA 2021 に反論されている. BALCEROWICZ 2016 は, ダルマキールティの「自分のための推論」章とそれに対する自注の年代を 570 ± 20 年としている.

できる¹⁰。ダルマキールティにより非難されている概念は実際にタントラのシヴァ教のものであり、その主要聖典の一つにある、以下に引用する偈頌にはっきりと説かれている。

*asmāt pravitatād bandhāt paraśaṃsthānirodhakāt |
dīkṣaiṣa mocayaty ūrdhvaṃ śaiṣaṃ dhāma nayaty api ||*

Svāyambhuvasūtrasaṃgraha 2.24.

b paraśaṃsthā N : parāśaṃsthā MF

ディークシャーのみが³、最高の状態に赴くことを妨げる、果てしない束縛から解き放ち、[私たちを]シヴァの光明へと引き上げてくれる。(『スヴァーヤンブヴァーストラサングラハ』2.24)

ダルマキールティがここで非難しているタントラのシヴァ教の形態は、シッダーンタ派 Saiddhāntika の主流のものである。この派は、飲食物やカーストの隔離に関する規則におけるバラモン教の伝統からの逸脱を避け、その礼拝において乳菜食のみを許すことにより、バラモン教の伝統に受け入れられることを模索した。

しかしながら、タントラのシヴァ教はこれらバラモン教的な制約を拒否する実践の諸形態も含んでいた。ダルマキールティは、〈「ダーキニータントラ Dākinītantra」や「バギニータントラ Bhaginītantra」のような〔諸体系〕〉に言及しており、これらのうち少なくともいくつかは、彼の生きていた時代にはすでに実践されていたことを示している¹¹。なぜならば、マントラは、その実行のために必要とされる誓戒が罪深いものであったとしても効果があり

¹⁰ *Pramāṇavārtika* 2.257c–267 (VETTER 1964, 116 頁での番号による)。

¹¹ *ḍākinībhaḡinītantrādiṣu. ḍākinītantram* そして *bhaḡinītantram* という語における *-tantram* という単数形は、単一の著作というよりは、個別のタントラの体系 (*śāsanam, śāstram*) やその体系を説いている諸聖典 (*Tantras*) を示している。したがって、ここでは『ダーキニータントラ』『バギニータントラ』のように個別のテキストとして示すのではなくダーキニータントラ、バギニータントラという表記でそれらの体系を示している。

うることの証拠として、彼がこれらのタントラを引き合いに出しているからである。

*vratacaryābhraṃśādinā dharmādharmopacaye dharmādharmā-
tmanor vā prakṛtyā siddhyasiddhī iti cen na, dharmaviruddhānām
api krauryasteyamaithunahīnakarmādibahulānām vratānām
ḍākinībhaginītantrādiṣu darśanāt taiś ca siddhiviśeṣāt.*

Dharmakīrti, *Pramāṇavārtikasavṛtti*, p. 163, ll. 3–5.

以下のことが主張されるかも知れない。例えば、[規定されている] 誓戒 [を忠実に実行すること] により福德を集めることで [マントラが] 成就し、例えば、そのようなことを怠り罪を集めることでマントラが成就しない。あるいは、マントラの成就の成否は、福德をもたらすか罪をもたらすかという、[誓戒それ自体の] 性質によるものである¹²。しかしながら、この立場は支持されない。なぜならば、我々は「ダーキニータントラ」や「バギニータントラ」といったマントラの体系に、徳のある行為に反するような暴力・窃盗・成功・卑しい行為などに満ちた諸誓戒があり、さらにこれらが特別な成就をもたらすことを見るからである。

¹² カルナカゴーミン Kaṇṇakagomin は『ブラマナーヴァールツティカスヴァヴリツティ注 *Pramāṇavārtikasavṛttiṭīkā*』において、ダルマキールティの *dharmādharmātmanoḥ* が誓戒を実行している者の倫理性に言及していると理解している：*dharmātmano puṃsaḥ siddhiḥ ...adharmātmano vā puruṣasya ...asiddhiḥ* (557 頁, 28–29 行)。しかしながら、ダルマキールティは誓戒それ自体の倫理性に言及しているとするのが、より蓋然性が高いと思われる。ダルマキールティは *vratacaryā* に言及するだけで、次の文では *dharmaviruddhānām ...vratānām* と述べ (ed. Gnoli, 163 頁, 3–4 行)、数行後には *adharmātmano vratādeḥ* および *adharmātmano vratasya* とある (10 行および 13 行)。(訳者注：つまり「ダルマに矛盾した」「非法の」という修飾語は *vrata* を修飾するだけで、「人 (*puṃsaḥ*, *puruṣasya*)」を修飾しているわけではない。) さらに、引き続き反論のターゲットとなっているのは、倫理的に潔癖な誓戒のみが目的の達成に導くという見解である。

(ダルマキールティ『プラマーナヴァールッティカスヴァヴリ
ッティ』163頁, 3-5行)

ダルマキールティの弟子デーヴェンドラブッディ Devendrabuddhi の弟子であるシャーキャブッディ Śākyabuddhi は、以上の一節で言及されている諸体系について、その注釈の中で更に情報を加えている¹³。その注釈は大部分がチベット語訳のみで伝承されているが、この一節を論じている箇所は、残りの箇所の大部分と同様に、サンスクリット語で現存する後代のカルナカゴーミンの注釈に逐語的に取り入れられている¹⁴。

na dharmāpekṣān mantrāt phalasiddhiḥ. kiṃkāraṇam. dharmaviruddhānām api mantrasiddhihetūnām vratānām ḍākinībhaginītantrādiṣu darśanāt, ḍākinītantrē bhaginītantrē¹ ādiśabdāc cauryahetuṣu <ca> kambukinītantrādiṣu darśanāt. kāni punas tāni dharmaviruddhānīty āha krauryetyādi. krauryaṃ prāṇivadhaḥ steyaṃ cauryaṃ maithunaṃ dvīndriya-samāpattir² hīnakarma mārjārāśucidhūpapradānādi.³ ādiśabdād anyasyāpi dharmaviruddhasya grahaṇam. tāni krauryādīni bahulāni bhūyāmsi yeṣāṃ vratānām tāni tathoktāni. taiś ca tathoktair vratāir mantrasiddhiviśeṣāt. tathā hi ḍākinītantrē samavyavasthā yadā prāṇinaṃ hatvā khādati tadā mantrasiddhim āsādayatīti.⁴ tathā kambukinītantrē steyācaraṇāt siddhir uktā. tathā maithunācaraṇāt siddhipradā kācid devateti bhaginītantrē⁵ kvacit samayaḥ.

¹³ FRAUWALLNER (1961, 145頁) はシャーキャブッディの年代をおよそ 600-720 年の間であると推定している。DELEANU (2019, 39頁) の提示する彼の生存年代はおおよそ 630-700 年である。INAMI et al. 1992, v 頁および注 4 も参照のこと。ここでは彼の生存年代をおおよそ 7 世紀後半に置いている。

¹⁴ 『シャーキャブッディ注』のこの一節のチベット語訳を通読するに際し野竹美弥子博士の援助を得た。ここに謝意を表する。

S = Kārṇakagomin, *Pramāṇavārtikasvavṛttiṭīkā*, ed. SĀṆKṚTYĀYANA, p. 578, ll. 6–16; Ś = Tib. tr. of Śākyabuddhi's *Pramāṇavārtikaṭīkā*, D39b2–7 and P44b7–45a6; A = facsimile of ms *Pramāṇavārtikasvavṛttiṭīkā* in IHARA 1998, ff. 203b5–204a1.

1 *bhaginūtantr* em. (*mkha' 'grom ma'i rgyud* Ś[DP]) : *caturbhaginūtantr* A 2 *maithunaṃ dvīṇdriyasamāpattir* corr. (*'khrig pa dbang po gnyis kyis snyoms par 'jug pa'o* Ś[DP]) : *dvīṇdriyasamāpattir maithunaṃ* A : *dvīṇdriyasamāpattir maithunaṃ* S 3 *dhūpa* em. (*bdug pa* em. [*'incense*'] em. : *gdug pa* [*'poison*'] Ś[DP]) : *dhūma* A^{pc} S : *dhū* A^{ac} 4 *āsādayatīti* conj. (*snags kyi dngos grub grub par 'gyur ro zhes dam tshig rnam par gzhas pa yin no* Ś[DP]) : *āsādayati* A 5 *bhaginūtantr* *kvacit* em. (*sring mo'i rgyud 'ga'zhig la* Ś[DP]) : *bhaginūtantrāntare kvacit* A.

マントラから生じるゴールの獲得は、それが、関連した誓戒における徳のある行為に依存する場合にのみ可能である、ということとは事実ではない。なぜであろうか？ 「ダーキニータントラ」や「バギニータントラ」¹⁵、そして彼（ダルマキールティ）が「など *ādi-*」という言葉を使用しているように、信奉者たちに窃盗を犯させる「カンブキニータントラ」など〔他の聖典〕において（← *dākinībhaginūtantrādiṣu*）、徳のある振る舞いに従っていない誓戒であってもマントラの成就をもたらしことが見られるからである¹⁶。しかしながら、徳のある振る舞いに反するそれらの〔誓戒〕とは何であろうか？ 彼は「悪しき行為」で始まる〔複合語〕で答えを述べているのである。すなわち、

¹⁵ 『カルナカゴーミン注』の写本にある *caturbhaginūtantr* という読みには問題がある。シャークヤブッディは単に *bhaginūtantr* 「姉妹タントラにおいて」とだけ述べている。*catur-*の付加は有効に機能していない。なぜならば、4人より多い、または少ない姉妹が礼拝されるマントラの体系は存在しないからである。シャークヤブッディ同様に、カルナカゴーミン (AS) はこの一節の最後に、*catur-*の付加されていない *bhaginūtantr* という語を使用している (*bhaginūtantr kvacit* (ŚĀKYABUDDHI [Tib. *sring mo'i rgyud 'ga'zhig la*) : *bhaginūtantrāntare kvacit* A) *samayah*)。

¹⁶ 管見の限り、当該箇所以外にカンブキニータントラ *Kambukinītantra* に言及しているものはない。

生き物を殺す、窃盗、男女の性器の結合¹⁷、猫の糞〔で作られた〕焼香を捧げるなどの卑しい行為である¹⁸。〔その複合語の最後にある〕「など *ādi-*」という語は、さらに他の、徳のある振る舞いに反する〔実践〕があることを暗に示しているのである。彼は、これらの実践の形態を暴力や他の〔彼が述べる罪のある諸行為〕に満ちていると述べているのである。〔そのように記述されている誓戒が存在することが見られ、〕、そして、それを通して諸マントラが特別の成功をもたらす〔ことが見られるから、ここでの反論者の立場は支持されない〕。より具体的に言うならば、「ダーキニータントラ」においては、生き物を殺し食らうとマントラを通して成就を得るという規則が確立している。同様に、「カンブキニータントラ」においては、成就には窃盗の実践が必要とされると述べられている。そして、「バギニータントラ」〔の文献〕のある箇所には、ある尊格が成就を授けるためには、性交に従事する必要があるという規則がある¹⁹。

¹⁷ この一節では、*krauryam*, *steyam*, *hīnakarma* というそれぞれぞれの用語が述べられ、その語釈が引き続いている。しかしながら、『カルナカゴーミン注』の写本においては、*maithunam* の場合に予想される順序とは逆になっており、*dvīndriyasamāpattiḥ* という語釈が先にくる。私は書写者が誤った結果として順序が逆になったととらえ、自然な順序を復元するよう *emend* した。『シャークヤブッディ注』のチベット語訳は、以下のようによりに予想される順序を示している。'khrig pa ni dbang po gnyis kyis snyoms par 'jug pa'o (*maithunam dvīndriyasamāpattiḥ*)

¹⁸ *dhūma* を *dhūpa*-とする（そして、『シャークヤブッディ注』のチベット語訳では *gdug pa* 「毒」を *bdug pa* 「香」とする）*emendation* をサポートするものとして、シヴァ教の『ピチュマタ *Picumata*』に、素材に猫の糞を含む燐剤の詳細について述べる箇所がいくつかある。例えば、f. 24v4-5 (4.444d-447); f. 231v3 (87.185); f. 211r5-v1 (58.79c-81) を見よ。この実践は仏教の「ヨーギニータントラ」である『ヴァジラダーカ *Vajradāka*』 f. 82v6 (44.3) にも取り入れられている。Cf. 若原 1988, 29 頁, 注 45. 若原はサンスクリット語およびチベット語を私と同様に *emend* する可能性があると見ているが、*emendation* の結果として得られる意味が記録されている儀礼実践と一致するかどうかを決定することができないという理由により、*emendation* を見送っている。

¹⁹ 私は『カルナカゴーミン注』の写本に見られる *bhaginitāntrāntare kvacit* という読みを、シ

(カルナカゴーミン『プラマーナヴァールッティカスヴァヴリ
ッティ注』SĀṆKṚTYĀYANA 版, 578 頁, 6-16 行)

ダルマキールティの言及する「ダーキニータントラ」と「バギニータントラ」は、仏教の「ヨーギニータントラ」タイプの文献かもしれないとこれまで提唱されてきている²⁰。しかしながら、この見解は確実に誤りである。なぜならば、ダルマキールティは自注の前の箇所、仏教タントラのマントラの体系はすでに彼の時代に存在していたが、彼がここで「ダーキニータントラ」と「バギニータントラ」に関連付けている暴力や性交といった特徴は、仏教タントラの中に見いだすことはできず、非仏教の諸体系にのみ見いだすことができることを明瞭に示している。この情報は、ヴェーダ全体と同様に、ヴェーダのマントラは、神、半神、人間といった意識を有する行為主体による創作ではなく (*apauruṣeyāḥ*)、世界の實在の一部として存在している、というバラモン教の見解に反論する過程に現れる。

na mantro nāmānyad eva kiṃcit. kiṃ tarhi. satyatapaḥprabhāvatatām samīhitārthasādhanaṃ vacanam. tad adyatve 'pi puruṣeṣu dṛśyata eva yathāsvaṃ satyādhiṣṭhānabalād¹ viśadahanādīstambhanadarśanāt śabarāṇām ca keṣāmcid adyāpi mantrakaraṇād avaidikānām ca bauddhādīnām mantra-kalpānām darśanāt teṣām ca puruṣakṛteḥ. tatrāpy apauruṣeyatve katham idānīm apauruṣeyam avitatham. tathā hi bauddhetarayor mantrakalpayor hiṃsāmaithunātmdarśanādayo 'na-bhyudayahetavo 'nyathā ca varṇyante. tat katham ekatra virud-

ヤークヤブッディ (Tib. *sring mo'i rgyud 'ga' zhig la*) にしたがって、*bhaginūtantr* *kvacit* と *emend* している。なぜならば、特定の「バギニータントラ」がまったく言及されていないのに、「他の「バギニータントラ」において (*bhaginūtantrāntare*)」というのは不適切であるからである。

²⁰ DAVIDSON 1981, 8 頁, 脚注 21. ここで DAVIDSON は、これらのタントラをおそらく「アヌッタラヨーガ *anuttarayoga* ・タイプ」と述べている。

dhābhidhāyi dvayaṃ satyaṃ syāt.

Dharmakīrti, *Pramāṇavārtikasvavṛtti* on v. 243, ed. GNOLI, p. 123, ll. 15–25.

1 *balād* MALVANIA's ed. of *Pramāṇavārtikasvavṛtti* and Kaṇṇakagomin ad loc. : *balā* ed. GNOLI.

マントラは完全に異なった種類の世界の实体 (entities) ではない。それではそれらは何であろうか？ それらは、真実を語ることと苦行より生じる力を有する意識のある行為主体の発話、[それゆえ] 成就することが求められるあらゆるものをもたらしことのできる [発話] である。そのことは実際に私たちの時代においても人間の間で事実であることが目の当たりにされている。なぜならば、(i) 私たちは、個々人が個人的な真実に訴える力により、毒・火など [の働き] を阻止するのを見たり (*yathāsvaṃ satyādhiṣṭhānabalāt*)²¹、(ii) 今でも [効果的な] マントラを作り出している [森林の住民である] シャバラ族が存在し、(iii) 私たちは、仏教や他の非ヴェーダのマントラの諸体系という証拠を有しており、そして、(iv) これら [すべて] が意識のある行為主体の作り出したものであるのである。もし [汝が、] これら [すべて] が意識のある行為主体の作り出したものではない [と主張するならば]、どのような意識の所産でもない発話という、汝にとってこのように拡張された文献群がどのようににまだ有効であるのか説明する必要がある。明瞭に述べるならば、生き物を害すること、性交、我 (アートマン) を信じることは、仏教のマントラの体系の聖典では苦に導くものであると説かれており、非仏教のそれ (マントラの体系) では

²¹ *yathāsvaṃ*, 文字通りには「自分自身にあてはまる通りに」。したがって、たとえば、ある人は自分の夫婦間の貞節の真実に訴えるかも知れないし、またある人はすべての生類に対する自分の慈悲の真実に訴えるかも知れない。降雨の祈りにおける後者の例に関しては、*Saṅghabhedavastu* II 13 を見よ。

逆のことが説かれている。それ故、そのことが [2 つの] 相互に矛盾する [見解] を一つの文献群の中に示すことになる以上、どのようにして [この] 二重 (dvayaṃ) [の教え] が真実たり得ようか？

(ダルマキールティ 『プラマーナヴァールッティカスヴァヴァリッティ』 GNOLI 版, 123 頁, 15-25 行)

「ダーキニータントラ」

加えて、「ダーキニータントラ」のマントラの体系の信奉者が成就を得るために犠牲者を殺してその肉を食らうことを要求されているという理由で、シャークヤブッディが、ダルマキールティが述べている暴力を「ダーキニータントラ」に特定して関連付けていることにより、以上述べてきたマントラの諸体系が仏教のものではないという理解がより一層支持されることになる。なぜならば、この犠牲者を殺しその肉を食らうことは、仏教の「ヨーギニータントラ」を定義づける特徴ではないことは確実であり、あるシヴァ教徒たちの間で行われていた儀礼実践について私たちが知ることと対応する。シヴァ教の『ネートラタントラ *Netratantra*』の第 12 章は、女性のタントラ信奉者たち（ヨーギニー *Yoginīs*）が瞑想を通して人間の犠牲者たちの身体に入り、その生命力あるいは「五甘露」を引き出し、自分たちの身体に引き込み²²、それによりその犠牲者たちを解脱させ、その生命のない身体が切り刻まれ、供養に捧げられることで²³、その犠牲者たちの命を奪う方法を詳細

²² *Netratantra* 20.2; *Netroddyota* on 20.37b; and on 20.38c-39, vol. 2, p. 233, ll. 8-9: **nāḍyudayakrameṇa* (MSS : *nābhyudayakrameṇa* Ed.) *sādhya* dehasthapañcāmṛtākaraṣaṇa-sāmarthyam 「ターゲットの身体にある五甘露を、エネルギー回路を活性化することで抜き取る能力」。Cf. *nāḍīnām udayakrameṇa jagataḥ pañcāmṛtākaraṣaṇād* in *Mālatīmādhava*, ed. GRIMAL 1999, Act 5, v. 2c; cf. SANDERSON 1985, 213 頁, 注 89. 五甘露に関しては, SANDERSON 2005, 110-114 頁, 注 63 を見よ。

²³ *Netroddyota* on 20.38c-39, vol. 2, p. 233, ll. 14-15.

に説いている。学識のあるシヴァ教徒であるクシェーマラージャ Kṣemarāja は、この一節に対する注釈において、この文脈で「様々な「ダーキニータントラ」に説かれている諸実践」に言及している²⁴。犠牲者の肉を食らうことに関して、クシェーマラージャは同じ文脈で、シヴァ教諸聖典は、ヨーギニーにより食べられた者は誰でも「死者の引き上げ Mṛtoddhāra」として知られる死後の入門が授けられるべきことを規定している、と述べることでこのことに遠回しに言及する²⁵。

この残忍な信仰に関する更なる情報は、ソーマデーヴァ Somadeva の『カタースリットサーガラ Kathāsaritsāgara』とクシェーマンドラ Kṣemendra の『ブリハットカターマンジャリー Bṛhatkathāmañjarī』を通して間接的に私たちに伝わっている。この両者は、それぞれ独立した作品で、同じくカシミールで作られた、おそらくは『ブリハットカタースーラ Bṛhatkathāsāra』というタイトルの、すでに失われてしまった膨大な物語の集成の改作である。一方、『ブリハットカタースーラ』はグナードウヤ Guṇāḍhya の失われた『ブリハットカタール Bṛhatkathā』にもとづいている。ここには以下のような話を見いだせる。

āḍityaprabhabhūpālāḥ sahasāntaḥpuram yayau ||
49 dvāḥsthasaṃbhramasāsaṅkaḥ¹ praviśyaiva dadarśa saḥ |
devīm devārcanavyagrām nāmnā kuvalayāvalīm ||
50 digambarām muktakeśīm² nimūlitavilocanām |
sthūlasindūratilakām japaprasphuritādharām ||

²⁴ Netroddyota on 20.38c–39, vol. 2, p. 233, ll. 12–13: *tattaḍḍākinītanantroktānām ācārānām*.

²⁵ Netroddyota on 20.40, vol. 2, p. 234, ll. 4–5. また、18.115cd の導入部となるクシェーマンドラの注釈も見よ (版本の *yogeśabhakṣaṇa* を *yogeśibhakṣaṇa* と emend している)。また、*Tantrāloka* 21.8 (*yogeśibhakṣitasya*) および SANDERSON 2004, 264–267 頁。この誤りはおそらく、カシミール語ではサンスクリット語からの借用語の最後の *i* あるいは *ī* が脱落することの影響により起こったのであろう。古カシミール語の *Mahānāyaparakāśa* にある以下の例を参照、*āḍideva* (4.5 and 10.7) ← *āḍidevī*, *ūma* (2.5) ← *ūrmiḥ*, *kālasaṃkarṣana* (4.6) ← *kālasaṃkarṣaṇī*, *bhūma* (2.5) ← *bhūmiḥ*, *śatta* (1.3c, 1.4b, 10.6b) ← *śaktiḥ*.

51 *vicitravarṇakanyastamahāmaṇḍalamadhyagām |*
aśṛksurāmahāmāṃsakalpitograbalikriyām ||

Somadeva, *Kathāsaritsāgara*, 3.6.48c–51.

1 *sāśaṅkaḥ* em. : *sāśaṅkāḥ* Ed. 2 *muktakeśīm* em. : *ūrdhvakeśīm* Ed.

アーディトウヤプラバ王は思いがけず〔宮殿の〕女性用の区画に赴いた。扉番たちが狼狽したことを訝んで中に入るやいなや、王妃クヴァラヤーヴァリーが眼に入った。彼女は裸で、髪はほどけ²⁶、礼拝に没頭しており、眼は閉じられ、大きな朱色のティラカが額にあり、小声でマントラをとなるたびにその下唇が震え、様々な色〔の粉〕で〔地面に〕整えられた複数色のマンダラの中央にいた。そしてそのマンダラには血、酒、人肉の恐ろしい食事供養が供えられていた。

(ソーマデーヴァ『カタースリットサーガラ』3.6.48c–51)

彼が入るやいなや、彼女は急いで服を着て、説明を許すように懇願する。彼女は、自分の礼拝行為が彼女自身のためでなく、彼の利益のためだけにあると弁明した²⁷。しかし彼女の説明でここでの議論に関連した部分は、彼女が幼少期にダーキニー *Ḍākinī* の信仰に入信したことと関係している。

101 *ity uktāhaṃ vayasyābhir udyānaikāntavartinam |*

²⁶ 私は *ūrdhvakeśīm* 「逆だった髪の毛で」を *muktakeśīm* 「髪はほどけ」と emend している。これは前者の形容は忿怒女神の図像的表現のみに使用されるものである一方、髪を結い上げずにいることは、このような礼拝に従事する人々の特徴として十分な証拠がある。以下の *Brhatkathāmañjarī* (3.333c–334a) における平行箇所も参照のこと。 *gavākṣāntarito 'paśyad yāgamaṇḍalapaṅkaje || 334 digambarāṃ muktakeśīm* 「〔彼女の信奉している〕諸尊格の曼荼羅の〔中央にある〕蓮華の図形の中央に、彼女が裸で髪の毛をほどいて〔立っているのを〕彼は窓に隠れて見た」。

²⁷ *Kathāsaritsāgara* 3.6.53ab: **tavaivodayalābhārthaṃ* (em. : *tadaivodayalābhārthaṃ* Ed.) *kṛtavatī asmi pūjanam* 「私が〔この〕礼拝を行ったのは、あなただけの成功を保証するためであります」。

āryaputra purā gatvā vighnarājāṃ apūjayam ||
102 *pūjāvasāne cāpaśyam akasmād gaganāṅgaṇe |*
utpatya viharantīs tāḥ svasakhīr nijasiddhitaḥ ||
103 *tad dṛṣṭvā kautukād vyomnaḥ samāhūyāvātārya ca |*
mayā siddhisvarūpaṃ tāḥ pṛṣṭāḥ sadyo 'bruvann idam ||
104 *imā nṛmāṃsāsānajaḥ ḍākinīmantrasiddhayaḥ |*
kālarātrir iti khyātā brāhmaṇī gurur atra naḥ ||
105 *evaṃ sakhībhir uktāhaṃ khecarīsiddhilolubhā |*
nṛmāṃsāsānabhītā ca kṣaṇam āsaṃ sasamśayaḥ ||
106 *atha tatsiddhilubdhatvād avocaṃ tāḥ sakhīr aham |*
upadeśo mamāpy eṣa yuṣmābhir dāpyatām iti ||
107 *tato madabhyarthanayā gatvā tatkṣaṇam eva tāḥ |*
ānīnyuḥ kālarātriṃ tām tatraiva vikaṭākṛtim ||

Kathāsaritsāgara 3.6.101–107.

このように女性の友人たちの助言を受けた私は、最初に庭園の一角にぽつんとあるガネーシャ Gaṇeśa のもとに行き、礼拝したのです。旦那様²⁸。私が礼拝を終えた時、私は友人たちが、自分たちの持つ超自然的な力で (nijasiddhitaḥ) 空中に昇り、あたりを飛び回るのに突然気づいたのです。それを見たとき、私は驚いて彼女たちを呼び、空中から下ろしたのです。私は彼女たちにこの成就の性質について尋ねると、彼女たちはすぐさま、これらの奇跡的な力はダーキニーたちのマントラのものであり、それらが人肉を食べることにより働くこと、そして彼女たちの師とはあるバラモンの夫人で、カーララートリという名前であることを語ったのです。私はこのことを友人たちから聞

²⁸ Skt. *āryaputra*. 字義は「ああ、尊敬すべき父の息子よ!」。この語は盛りの時期にある主人に対して、妻が呼びかける形として規定されているものである。

くと、私もこの空中浮遊の成就²⁹を是非とも得たいと思ったのです。私は、人肉を食べることを恐れしばらくためらっていましたが、この成就を得たいという気持ちが勝り、友人たちに私もこの教えを受けることができるように取り計らうようお願いしたのです。私がお願いすると彼女たちはすぐさま立ち去り、[彼女たちの師である] カーララートリを連れて戻ってきました。その師はひどく醜い女性でした。

(『カターサリットサーガラ』 3.6.101-107)

その師の並外れた醜さを述べる二詩節の後、クヴァラヤーヴァリーは説明を続ける。

110 *sā mām pādanatām snātām kṛtaviḡhneśvarārcanām |*
vivastrām maṇḍale bhīmām bhairavārcām akārayat ||
111 *abhiścya ca sā mahyaṁ tāmś tān mantrān nijān dadau |*
bhakṣaṇāya nṛmāmsaṁ ca devārcanabalikṛtam ||
112 *āttamantragāṇā bhuktamahāmāṁsā ca tatkṣaṇam |*
nirambaraivotpatitā sasakhikāham ambaram ||
113 *kṛtakrīḍāvatīryātha gaganād gurvanujñayā |*
gatābhūvam ahaṁ deva kanyakāntahpuraṁ nijam ||
114 *evaṁ bālye 'pi jātāhaṁ ḍākinīcakravartinī |*
bhakṣitās tatra cāsmābhiḥ sametya bahavo narāḥ ||

Kathāsaritsāgara 3.6.110-114.

私が礼拝して彼女のもとにひれ伏し、儀礼的沐浴を行い、ガネーシャへの供養を終わらせると、私は裸のままバイラヴァ Bhairava のマンダラで、バイラヴァに対する恐ろしい礼拝をさせられました。彼女はそれから私を聖別し、自らの様々なマン

²⁹ *khecarīsiddhiḥ* 「それらの空中飛行する [ヨーギニーたち] の超自然的な力。」

トラを私に伝授しました。そして私に食すべき人肉を与えました。その肉はその〔ガネーシャ〕神に生贄として捧げられた〔ばかりの〕ものでした。私がマントラを授かり人肉を食べるやいなや、私は裸のまま友人たちと空中に上昇しました。陛下、それから〔十分に長い時間〕遊んだのち、私は降下し、師の許可を得て、未婚の女性 (*kanyakā*) のために設えられた王宮の一角にある私の住居へと戻ったのです。このようにして、私はまだ子供だったにも関わらず、ダーキニーの集団の一員になったのです。そして私たちは〔何度も〕集まり、多くの人間を食らったのです。

(『カターサリットサーガラ』 3.6.110-114)

クシェーメンドラの語るこの物語は少しばかり異なっており、いくつかの事項が加わっている。クヴァラヤーヴァリーが礼拝させられる神は、ソーマデーヴァによればバイラヴァと呼ばれているが、クシェーメンドラによればマハーカーラ *Mahākāla* である。私たちがソーマデーヴァの説明から推測しなければならないのは、クヴァラヤーヴァリーが体験した儀式は入門儀礼 (*dīkṣā*) であるということである。クシェーメンドラの物語ではこのことが述べられている。彼はまた、クヴァラヤーヴァリーが入門させられ、人肉を食し、マハーカーラを見た結果として、彼女が自分の意のままに姿を変えることができ、殺人 (*māraṇa-*)・追い払うこと (*uccāṭana-*)・自分に引き付けること (*-ākārṣe*) 〔のために執り行う諸儀礼〕において自分の師を凌ぐほどのヨーギニーになったことを述べている³⁰。クシェーメンドラのヴァージョンでは、カーララトリと彼女の入門者の集団は偽装したダーキニー、すなわち、自分たちの本当のアイデンティティを隠し社会の中で生活するダ

³⁰ *Bṛhatkathāmañjarī* 3.373. ここでは *Ḍākinī* と *Yoginī* (あるいは *Yogeśvarī* または *Yogeśī*) という術語が互換的に使用されていることに注意。

ーキニーであったこと³¹，そして彼女たちが真夜中に死体遺棄場で集会を行うことが語られている³²。

ここまででダルマキールティに知られていたダーキニータントラの信仰はシャクタ的シヴァ教であったことが明らかになったはずである。「ダーキニータントラ」において成就を得るために人を殺し生き物の肉を食らうことが要求されるというシャクヤブッディの情報と、『カターサリットサーガラ』や『ブリハットカターマンジャリー』で語られている正体を隠したダーキニーであるクヴァラヤーヴァリーの物語の親近性からこのことは明らかになった。そして、後者の物語は、これらの同じありのままの真実を、関連した入門儀礼とそれに引き続く実践の物語仕立てにすることで、ダーキニーの集団に入門するためのマンダラ儀礼が、シヴァ教の神であるバイラヴァに対して血・酒・人肉といったおどましい供物を捧げること、すなわち、これらの人間のダーキニーたちの、死体遺棄場における定期的な夜間集会の一般的な特徴として見られる礼拝を伴うものであったことを知らしめてくれる。この見通しに上述した、学識あるシヴァ教の学者であるクシェーマラージャが言及する「様々な「ダーキニータントラ」において説かれている実践」を加えて良いであろう。これは、シヴァ教の『ネートラタントラ』のヨーギニーたちが犠牲者を殺す方法を論じる文脈において言及されるものである。

私が提案するに、ここにインドの諸宗教に関するムスリムの説明という証拠を加えて良いであろう。なぜならば、マクディシー Maqdisī (946 年死去)、マルヴァジー Marvazī (1120 年以降死去)、ガルディージー Gardīzī (11 世紀初頭)、シャフレスターニー Shahrastānī (1153 年死去) が言及するものが、おそらくはこの信仰の信奉者であったからである。彼らはその信奉者たちを人間を犠牲にするために騙して罠にかける諸セクトとして言及しており、この信仰の信奉者たちの名前を諸写本において、ダフキニーヤ Dahkinīya, タ

³¹ *Bṛhatkathāmañjarī* 3.371: *channā vayaṃ ca dākinyāḥ* および 3.375: *tasyāḥ pracchannaḍākinyāḥ*.

³² *Bṛhatkathāmañjarī* 3.381 および 3.142.

フキニッヤ *Tahkiniyya*, ダンカニヤ *Dankaniya* などと様々な形で呼んでいる³³。

「バギニータントラ」

ダルマキールティの言及する「バギニータントラ」(「姉妹タントラ」)に関して、そのような名称で分類されていた、あるいは分類されていた可能性のあるタントラが仏教文献中に存在したという証拠はない。そして彼が言及する「ダーキニータントラ」同様に、この非仏教の信仰が、シャクタ的な傾向をもつシヴァ教の伝統、つまり、ジャヤー *Jayā*・ヴィジャヤー *Vijayā*・ジャヤンティー *Jayanṭī*／アジター *Ajitā*・アパラージター *Aparājītā* の四姉妹とその兄弟であるトゥンブル *Tumburu* の伝統であることにほとんど疑いはない。この信仰を支持するシヴァ教聖典の一群は一般的に「ヴァーマタントラ *vāmatantram*」あるいは「ヴァーマスロータス *vāmasrotah*」, すなわち「左タントラ」あるいは「左流」と名付けられている。というのも、ダルマキールティよりかなり後の時代に導入された、広範の資料に証拠のあるマントラマールガ *Mantramārga* (真言道) の聖典の五分法において、5つの顔を持つサダーシヴァの左側にある、つまり北向きのヴァーマデーヴァ *Vāmadeva* の顔から出たとされているからである³⁴。後のタントラの展開により背後へと押しやられ、かつて膨大に存在した文献群がほぼすべて失われたため、この伝統への言及は皆無に等しい。しかしながら、初期シヴァ教シッダーンタの聖典『ニシュヴァーサカーリカー *Niśvāsakārikā*』の以下の一節に、その伝統が「姉妹タントラ」として明瞭に言及されているのが見られる。おそらくは、『ニシュヴァーサカーリカー』自身以外のマントラマールガの諸形態

³³ この報告に関しては、LAWRENCE 1976, 226–237 頁を参照。

³⁴ 例えば、*Vīṇāśikha* ms, f. 13v6–7 (paratext) を見よ：*vīṇāśikhaṃ vāmatantram sampūrṇam*. *Vīṇāśikha* をヴァーマタントラであると述べている。サダーシヴァの左の顔は北を向いているので、ヴァーマタントラは「北タントラ」としても知られている (*Netra* 11.1: *tantram uttaram*)。

が存在することへの最初の言及であろう。

225 *śṛṇu devi pravakṣyāmi śikhābhedam anuttamam |*
yena vijñātamātreṇa sidhyate sādḥako bhuvi ||
226 *gāruḍe bhūtatantra ca bhaginīnām tathaiva ca |*
śaivajñānaṃ paraṃ divyaṃ śikhākarma manoramam ||

Niśvāsakārikā, A, p. 451 (44.225–226); B, p. 229.

225d *siddhyate* B : *sidhyante* A • *bhuvi* A : 'pi vā B **226c** *paraṃ divyaṃ* conj. : *pare divye* AB.

おお、女神よ！聞きなさい。[今] 私は、〈炎(śikhā)〉を[観想する] 異なる方法のうち、最高[の事柄]を[汝に] 説こう。この知識はサーダカ Sādhaka (実践者) の地上での支配を保証するのに十分である。〈炎〉のこの喜ばしい儀礼は、「ガールダ[タントラ] Gāruḍa」, 「ブータタントラ Bhūtatantra」, 「姉妹[タントラ]」において³⁵ シヴァが説いた最高の超常的な知識である。(『ニシュヴァーサカーリカー』A, p. 451 (44.225–226); B, p. 229)

次にその応用の最初の例が述べられる。

227 *śuklagokṣīrasaṃkāśā śaṅkhakundendusaṃnibhā |*
śikhā mṛtyuñjayārthāya dhyātavyā yogibhiḥ sadā ||
228 *meghadhārānīpātena pūrayantī samantataḥ |*
āpyāyate jagat sarvaṃ viśagrahādi nāśayet ||

Niśvāsakārikā A, p. 451 (44.227–228); B, p. 229.

227c *mṛtyuñjayārthāya* A : *mṛtyuñjayārthayā* B **227d** *yogibhis* B : *yogabhis* A **228b** *pūrayantī* em. : *pūrayanti* A : *pūrayantaṃ* B **228c** *āpyāyate* conj. : *ācāryate* AB **228d** *viśagrahādi nāśayet* conj. (cf. *Svacchanda* 12.130ab: *viśagrahādi sarvaṃ tu dhyānān nāśayate kṣaṇāt*) : *viśagrahavināśayet* AB.

³⁵ *tantra* は *bhūta-* および *bhaginīnām* の両方とともに読まれなければならない、つまり、*bhūtatantra bhaginīnām tantra ca* と読まれなければならない。

〔差し迫った〕死を克服するために、ヨーガ行者たちは常に〈炎〉を白い牛、牛乳、法螺貝、ジャスミン、あるいは月の色をしていると観想し、〔その観想の対象を雨雲〕から放たれる豪雨〔のような甘露の激流〕で満たすべきである。それはあらゆる生き物の健康を回復し、〔そして〕毒や体内に侵入する悪鬼を取り除く力を持つのである。

(『ニシュヴァーサカーリカー』A, p. 451 (44.227–228); B, p. 229)

『ニシュヴァーサカーリカー』では上述の引用ののち、この瞑想の他の変化形を説いている。そこでは、この実践のゴールに応じて、赤、黄、黒といった異なる色で〈炎〉が観想されることが要求されている。例えば、儀礼の対象を人の制御下に従属させる (*vaśikaraṇam*, *vaśyam*) ため、あるいは対象となる人間を強制的に人のもとに来るように望ませる (*ākaraṣaḥ*, *ākaraṣaṇam*) ためには赤³⁶、動かなくする (*stambhanaṃ*) ためには黄色、追い払う (*uccāṭanaṃ*)、紛争を引き起こす (*vidveṣaḥ*)、あるいは殺す (*māraṇam*) ためには黒³⁷、といった具合である。

当該のトピックは以下の引用で終わる。そこでは以上で概要を述べた実践法がシカーヨーガ *śikhāyogaḥ*、すなわち〈炎〔を観想する〕技法 (*yogaḥ*)〉と呼ばれている。

240 *śikhāyogam idaṃ devi kathitaṃ tava suvrate |*
sarvatantreṣu sāmānyaṃ tena siddhir na saṃśayaḥ ||
241 *śikhayā rahitāṃ devi yaḥ siddhim abhikāṅkṣati |*
hanate muṣṭinākāśaṃ pibate mṛgaṭṛṣṇikām ||

³⁶ *Niśvāsakārikā* 44.331c: *vaśikaraṇam* **ākaraṣaṃ* (conj : *āveśaṃ* AB). Cf. 48.71c–72b: *vaśikaraṇa ākarṣe ...raktavarṇāś ca te sarve dhyātavyāḥ sādhakena tu; Vīṇāśikha* 86c: *vaśyākaraṇakāryeṣu*; 228b: *vaśyākaraṇakarmasu*; 263c: *vaśyākaraṇakam kuryād*; 315c: *vaśyākaraṣas*; 347cd: *dhyāyet sindūrasadrśaṃ vaśyākaraṇakarmaṇi*.

³⁷ *Niśvāsakārikā* 44.235cd: *uccāṭanaṃ tu* **vidveṣaṃ* (em. : *vidveṣa* AB) **māraṇam* *mohanaṃ* (em. : *karaṇam* *mocanaṃ* AB) *tathā*.

Niśvāsakārikā, A p. 454 (44.240–241); B p. 229, lacks A's 240b through 241a.

240b *suvrate* corr. : *suvṛte* A **240cd** *sāmānyam tena siddhir* conj. : *sāmānyam tantrasiddhir* A.

おお、女神よ！私の忠実な妃よ！私は〔シヴァ教〕タントラのすべて〔の分類〕に共通して説かれている、この〈炎の技法〉を〔今〕説明した。これが成就をもたらすことに疑いはない。
おお、女神よ！それを用いずに成就を希求する者は誰でも、虚空をなぐったり、蜃気楼〔の水〕を飲むようなものである。

以上の〈炎の技法〉に関する一節は、以下の事柄を伝えてくれる。第一に、「姉妹タントラ」に言及するに際してこの一節の念頭にあるのは、『ニシュヴァーサーリカー』が編纂された当時に認識されていた通りのシヴァ教聖典のメジャーな分類である。第二に、この分類は後の時代にマントラマールガの「左流」と呼ばれるようになる。第一の結論は、『ニシュヴァーサーリカー』が「姉妹タントラ」と2つのメジャーなシヴァ教の聖典群を同置しているという事実にサポートされる。これら2つの聖典群は、後代のマントラマールガを5つの流れに分ける分類法において、サダーシヴァ *Sadāśiva* の正面を向いている、すなわち東を向いているタトゥプルシャ *Tatpuruṣa* の顔から出てきた教えであると信じられる「ガールダタントラ *Gāruḍatantra*」,そして、後ろ、すなわち西を向いているサドゥヨージャータ *Sadyojāta* の顔から出てきた教えであると信じられる「ブータタントラ *Bhūtantra*」である。この結論はただ単に、上述の一節において「姉妹タントラ」が、シヴァ教のものであることが疑い得ない2つの聖典群と同置されているということのみにもとづいているのではない。なぜならば、ここでは当該の実践法がタントラの3つのクラスすべてにおいて説かれていると述べられているからである。したがって、「姉妹タントラ」は実際に当時のシヴァ教の伝統におけるメジャーな支分であったことに疑いはないのである。

「姉妹タントラ」と呼ばれている分類が「左流」のタントラであるという第二の結論に関しては、ヴァーマの尊格のセット以外に、メジャーなものであれマイナーなものであれ、この「左」という名前を正当化する尊格のセットの証拠はない。しかし、より肝となるのは、〈炎の技法 (*śikhāyogaḥ*)〉が実際にヴァーマに分類される聖典において説かれていたという証拠があることである。初期の聖典の記述の中でリストに挙げられている、かつての膨大なヴァーマの文献は、そのほとんどが私たちには伝わっていない。その主要な文献の1つである『ヴィーナーシカ *Vīṇāśikha*』³⁸の393詩節からなるテキストが、ただ一つの証拠である、おそらくは12あるいは13世紀に北東インドの書体で書かれた貝葉写本に損なわれることなく保存され、私たちに伝わっている³⁹。これは短い文献ではあるが、前時代のこのクラスの主要聖典を日陰に迫りやる、アップデートされた信仰形態に相当する、かなり重要な文献であったと思われる。テキストの冒頭(第4-9偈)において、女神はすでに『サンモーハナ *Samṃmohana*』『ナヨーッタラ *Nayottara*』『シラシュチェーダ *Śiraścheda*』をすでに説いてもらっていることを認めているが、それらに従うことで得る成就が、困難な誓戒や儀礼を伴い、人々が一般的にそれを行うための必要な持久力と資金を欠いていることに不満を述べている。それゆえ、彼女はイーシュヴァラ *Īśvara* にゴールまでより簡易に到達できるマントラを自分に伝えるよう懇願する⁴⁰。

³⁸ *Vīṇāśikha* という形は *vīṇāśikhātāntram* の任意の省略で、脱落した最終語幹の性が先行する語幹に移行している。

³⁹ 『ヴィーナーシカ』の確実と思われる年代については、Goudriaan 1985, 6頁を参照。このテキストには別の写本が存在するが、独立した証拠とはならない。これは、1925年に同じ貝葉写本から書写されたものである。

⁴⁰ *Vīṇāśikha* (Ed. = Goudriaan 1985, vv. 4-6; A = MS, f. 1v2-3): 4 *śrutaṃ saṃmohanam tantram tathā nayottaram *mahat* (A^{pc}: *mahān* A^{ac}) | *śiraśchedaṃ ca deveśa *ivaprasādāt* (corr.: *ivaprasāda* A Ed.) *sudurlabham* || 5 *vratasādhyāni caitāni yāgasādhyāni vai punaḥ* | **alpasārā* (A: *anyasārā* Ed.) *yato *lokāḥ* (*lokā* A: *loke* Ed.) *prāyo draviṇavarjitāḥ* || 6 *ebhyo 'pi cottaram *tasmāt* (conj.: *yasmāt* A) **kevalajñānasiddhidam* (*kevala* em.: *kevalam* A Ed.) | *sarvakāmapradam deva yathāvad bījapañcakam* || *uttaram hrdayam caisāṃ *bhaktebhyo* (conj.: *bhaktāya* A Ed.) *dātum arhasi*.

これらの4文献、すなわち女神が言及する3つのタントラとそれらに引き続く4番目として加えられる『ヴィーナーシカ』が、シヴァ教諸文献にタイトルがリストアップされている多くの「ヴァーマタントラ」の聖典のうちでもっとも卓越したものであることは、サドックコークトム Sdok Kak Thom (アンコールから北西に130kmほどの場所で現在はタイの領内)から出土した1052年のサンスクリット語と古クメール語の碑文から確認される。なぜならば、この碑文はサンスクリット語の部分で、トゥンブルの4つの顔としてこれらの4つのテキストに言及しており、その一方でジャヤヴァルマン2世 Jayavarman II (在位802-約835年)が9世紀初頭にクメールの連合王国を打ち立てたときに、ヒラニヤダーマ Hiraṇyadāma という人物に王国の継続的な統合と独立を確かにする儀礼を確立するように正式に依頼したことを記している。古クメール語の部分ではこの儀礼が『ヴィーナーシカ』に従い実行されたこと、そしてヒラニヤダーマが引き続き4つのテキストすべてをシヴァカイヴァルヤ Śivakaivalya に唱え、説いたことを伝えている。このシヴァカイヴァルヤは、王の師であり司祭 (Hotar) であり、定期的な国防の礼拝を導入し、その司祭職は世襲されるものであった⁴¹。この儀礼の典拠として選ばれたのが『ヴィーナーシカ』であるという事実、そして『ヴィーナーシカ』がこれらのヴァーマの文献のうち現存する唯一のものであるという事実は、この聖典が9世紀の初頭まで他の3つの聖典を背後に押しやってしまうほどの人気を確立していたということを示唆している。

ところで、このテキストにおいて〈炎の技法〉は単に説かれているだけではなく、女神がこのタントラを説くことを請願する冒頭偈の直後に言及されることで、このテキストに特徴的な教えとしての重要な地位を与えられている。

10 devyās tumburusamṣuktā vīṇādhārasusamsthītāḥ |

⁴¹ SANDERSON 2004, 233-238 頁を参照。

śikhāyogena iḥyante tena vīṇāśikhā smṛtā ||

Ed. = GOUDRIAAN 1985; MS: A f. 1v5.

10a *devyās tumburusamṣyuktā* conj. (Aīśa *devyās* for *devyas*) : *devyā tumburusamṣyuktā* A : *devītumburusamṣyuktā* Ed. **10b** *susamsthītāḥ* conj. : *susamsthītā* A Ed. **10c** *iḥyante* A : *iḥyante* Ed.

トゥンブルとともにその〔4人の〕女神たちは、〈琵琶 *vīṇā*〉という基体に確立されており、〈炎の技法〉を用いることで崇拜されるのである。これゆえ、[私が汝に説くこのタントラは] ヴィナーシカー *Vīṇāśikhā* として知られるのである。

ここでの〈琵琶〉は世界（マクロコスモス）であり、崇拜者の身体（ミクロコスモス）でもある。その〈琵琶〉と〈炎〉の本質は、その知覚がヴァーマの神々の崇拜に力を与えるために保持されるが、そのことが以下の引用において明らかにされている。

yathā tārāgaṇaṃ sarvaṃ grahanakṣatramaṇḍalam ||
248 *dhruveṇādhiṣṭhitāṃ sarvaṃ acalaṃ parivartate |*
tadvac charīraṃ devasya sarvabījagaṇaṃ hi yat ||
249 *śīveṇādhiṣṭhitāṃ jñātvā tantre siddhim avāpnuyāt |*
trikubjī kuṭilākārā śaṣṭhasvarasamanvitā ||
250 *śaktir binduvinirbhinnā dehassthā sakalātmikā |*
asyās tejaḥśikhā sūkṣmā mṛṇālatantusaṃnibhā ||
251 *jyotīrūpā ca sā jñeyā tasyānte tu paraḥ śivaḥ |*

Ed. = GOUDRIAAN 1985; MS: A f. 8v7–9r2.

247c *tārāgaṇaṃ* corr. : *tārāgaṇaṃ* A Ed. **248a** *dhruveṇādhiṣṭhitāṃ sarvaṃ* conj. : *dhruvādhiṣṭhitatā sarvvaṃ* A Ed. **249c** *trikubjī* conj. : *trikubjī* A Ed. **249d** *samanvitā* Ed. : *samanvitāṃ* A **250a** *śaktir binduvinirbhinnā* Ed. : *śaktibinduvinirbhinnāṃ* A **250b** *dehassthā sakalātmikā* Ed. : *dehasthaṃ sakalātmakaṃ* A **251a** *jyotīrūpā* A : *jyotīrūpā* Ed. **251b** *paraḥ śivaḥ* conj. : *punaḥ śivaḥ* A Ed.

星の群れ、惑星や星宿の集団がそのすべてにおいて、北極星に

より統率されることでその場所から移動せずに回転するのと同様に、尊格の身体であるあらゆる種字の集まりはシヴァにより統率される [ことで機能している]。これを知ることにより、[この] タントラにおいて成就を得る。3つの曲がりがあり、第6の母音 (= ū) を伴い、点が上についた湾曲した形のシャクティ Śakti (= H) (つまり HŪṂ) は、シヴァの内在的側面として [私たちの] 身体に住する。[その点の上に] 彼女は、蓮の茎から抜かれた [ほとんど見えない] 繊維に似た微細な炎 [として存在して] いる。これが光明の形をしたシャクティであると知れ、彼女の上限に最高のシヴァがいる⁴²。

また、

350 *sarvendriyāṇāṃ kurvīta upahāraṃ mahādhipe |*
hṛtpadmakarṇikordhvaṃ tu suṣīraṃ tatra cintayet ||
351 *sphuliṅgaṃ karṇikārūpaṃ nirdhūmatejarūpiṇam |*
dhūmajvālāvinirmuktaṃ sūryakoṭīsamaprabham ||
352 *tasyordhve tu śikhā sūkṣmā nirmalā sphaṭikopamā |*
nityaṃ sāvīryate yuktair yogibhir niṣkalā parā ||
353 *ūrṇatantusamākārā ūrdhvasrotā nirūpamā |*
tatra madhye gatāḥ paśyedyā guhyottarodbhavāḥ ||
354 *vālāgrasatabhāgābhā vīṇādhārasusaṃsthitāḥ |*
dhyāyeta nityaṃ yogīndraḥ sūkṣmā guhyasamudbhavāḥ ||

Vīṇāśikha 350–354. Ed. = GOUDRIAAN 1985; MS: A f. 12r4–5.

⁴² ここでシャクティは *kuṭīlākārā* 「曲がった形をしている」と述べられている。私は、これが H と呼吸の同一性を暗に言及していると捉えている。呼吸は、吸気 (*apānaḥ*) と呼気 (*prāṇaḥ*) を通して、その進路において「曲がっている」からである。種字 HŪṂ は、生体エネルギーが、中央脈管を通して、眉 (HŪṂ の点) と頭蓋の孔 (梵孔 *brahmarandhram*) の間のポイントに上昇することの似姿として表示されている。

350b *upahāraṃ* conj. : *upahāre* A Ed. **352b** *sphaṭīkopamā* em. : *sphāṭīkopamā* A Ed. **353a** *ūrṇātantu* conj. *ūrṇātantu* Ed. : *urṇātantu* A **353b** *ūrdhvasrotā* Ed. : *śrotā* A • *nirūpamā* (em. : *nirupamā* Ed. **353c** *gatāḥ* em. : *gataṃ* A Ed. **353d** *devyā* A : *devyām* Ed. • *guhyottarodbhavāḥ* conj. : *guhyottarambhavā* Ed. **354d** *vālāgraśatabhāgābhā* conj. : *vālāgraśatabhāgākhyā* A Ed. **354b** *vīṇādhārasusaṃsthītāḥ* conj. : *vīṇādhārāsusaṃsthītā* A Ed. **354c** *nityaṃ* Ed. : *nitya* A **345d** *sūkṣmā guhyasamudbhavāḥ* conj. : *sūkṣmaguhyasamudbhavām* A Ed.

おお、神々のうちの偉大な女王よ！彼 [=実践者] は感官すべてを [心蓮華の中に] 引き込み⁴³、そこにおいて [中央にある] 花托の上に上昇する空洞の導管を観想するべきである。その花托の形は、煙も [立ち上がる] 炎もない、無数の太陽の輝きのある煙のない火に似ている [と観想するべきである]。その上に、あらゆる汚れを離れた、ほとんど知覚できない、水晶のような「炎」がある。深い専心状態に入った瞑想者は、超越的で最高の、垂直に上へと伸びていく、蜘蛛の糸にも似た、無比のもの [として] それを敬うべきである⁴⁴。その中央に秘密のウッタラ Uttara [の心種字] より生じる女神たちを観想するべきである。ヨーガの熟達者は、1本の髪の毛の先端の100分の1の大きさで、基体である〈琵琶〉にある、これらから生じる女神たちを常に瞑想するべきである。

したがって、『ニシュヴァーサカーリカー』の言う「姉妹タントラ」がヴァーマであり、これこそがダルマキールティが「バギニータントラ」として言及しているものであるという結論に何の障害もない。しかしながら、今ひ

⁴³ 私は *kurvīta upahāraṃ* の *upahāraḥ* を、「供物」というよりは、*upasaṃhāraḥ* あるいは *pratyāhāraḥ* 「引き込むこと」を意味していると取っている。

⁴⁴ 写本の読みである *ūrṇātantusamākārā* が正しければ、これは羊毛の繊維との比較になる。私はその読みは *ūrṇātantu*-の誤りであると推測した。私の理解では、これは *ūrṇanābhatantu*-「蜘蛛の糸」という複合語の省略形であり、光沢があり、縮れがなく、極度に繊細であるので、標準的な比喻により適合する。

とつ対処すべき問題が残されている。シャークヤミトラによれば、「ダーキニータントラ」や「バギニータントラ」などのマントラの体系の誓戒に満ちているものとしてダルマキールティが性交、暴力、窃盗に言及しているなかで、性交は「バギニータントラ」の特徴であると理解すべきである。この項目は私たちに唯一残されているヴァーマの聖典では確認できない。なぜならば、このテキストに説かれている儀礼の大部分は、バラモンの礼節により設定された領域の中にとどまっている。調伏魔術のコンテキストで人肉の供物を祭火に捧げることが現れる⁴⁵。しかしながら、酒や肉の摂食や性交を伴う誓戒はおろか、定期的儀礼における酒や肉の供物への言及もない。

しかしながら、このことはダルマキールティやシャークヤブッディが無知であったり、彼らの解釈が誤りであったことを証明している訳ではない。『ヴィーナーシカ』はタイトルの知られている多くのヴァーマの中のたった1つのタントラであり、それゆえ、『ヴィーナーシカ』が儀式的な性交を説いていないことはさほど重要ではない。それは、特にシャークヤブッディが儀式的な性交がその文献群の「あるところに」説かれていると述べていることから言えるのである。更に、聖化された性交を含む反文化的な誓戒行がヴァーマの中に実際に説かれていることを証明するシヴァ教の文献がある。

1. シッダーンタのラージャグル *Rājaguru* (王師)であるヴァイローチャナ *Vairocana*⁴⁶ は、自身がマントラマールガの5つの支分の熟達者であることを誇っており⁴⁷、その著作の『ラクシャナサングラハ *Lakṣaṇasaṃgraha*』でそれら5つの支分それぞれの反文化的な必須事項の要約を述べていおり、彼はそこでヴァーマタントラの儀礼が飲酒 (*vāmāmṛtam*) を要求していることを述べている⁴⁸。

⁴⁵ *Vīṇāśikha* 188–189.

⁴⁶ 彼の年代および地域については、SANDERSON 2014, 28–29 頁, 註 103 を参照。

⁴⁷ *Lakṣaṇasaṃgraha* 32.74.

⁴⁸ *Lakṣaṇasaṃgraha* 2.131–132: *siddhānte caturvarṇānnabhojanam gāruḍe viṣam | ekatra bhojanam ghore vāme vāmāmṛtam tathā || bhūtātantre śavasparśaḥ pañcasrotaḥsv ayaṃ vidhiḥ | ācāret samayān pañca yaḥ sa ācārya ucyate* 「シッダーンタにおいて、4 カース

2. シヴァ教聖典の『シュリーカンティー *Śrīkaṇṭhī*』は、シヴァ教聖典のヴァーマ部の説明で、ヴァーマ部の主要聖典の1つである『シャウクラ *Śaukra*』に関して、『シャウクラ』が、アスラ *Asura* たちの教師であるシュクラ *Śukra* に対してヴァーマデーヴァにより説かれ、シュクラが〈ヴァーマ・アーチャーラ *vāmācāraḥ* (左の実践) を喜ぶ〉他の者たちにそれを伝えたことを説いている⁴⁹。

3. 『マードヴァクラ *Mādhavakula*⁵⁰』には、アルコールや他の特定されていない〈不二の物質 (*advaitadravyāṇi*)〉の供物を要求するマントラの神々を供養することで、自身と同様にバラモンの規範を逸脱する宗教体系とそのような逸脱がない宗教体系の間に線引きをしている一節が含まれる。「ヴァーマタントラ」のマントラは、「サウラタントラ *Sauratantra*」, 「ガールダタントラ *Gārūḍatantra*」, 「ダクシナタントラ *Dakṣiṇatantra*」, カウラ *Kaula* の諸タントラ — 低位のカウラ (*kulāṇi*) と高位のカウラ (*akulāṇi*) の両方 — のマントラとともに、その供養において酒を絶対に必要とするマントラの中

トすべてからの食べ物を食べなければならない。「ガールダ」においては毒を、「バイラヴァタントラ」においては (*ghore*)、一つの器から [他人と] 食事をしなければならない。「ヴァーマ [タントラ]」[においては]、酒を (*vāmāmṛtam*) [飲まなければならない]。そして、「ブータタントラ」においては、死体と接触しなければならない、これが、[シヴァ教聖典の] 5つの流れにおける手順である。これらの5つの規則すべてを実行する者 [のみ] が、阿闍梨と呼ばれる [にふさわしい]。」秘儀的なシヴァ教において、*vāmāmṛtam* がアルコール飲料を意味する専門用語であることについては、*Tantrāloka-viveka* on 29.11–13, 第11巻, 13頁, 8–9行、および *Kubjikāmata* 25.224 を参照。 *Manusmṛti* 11.53, 11.90–98, および 11.146–149 (verse numbers as in the edition of Medhātithi's *Bhāṣya*)。飲酒がバラモン教の文献において単に禁じられているだけでなく、最も凶悪な5つの罪の一つと考えられている。 *Manusmṛti* 11.53, 11.90–98 および 11.146–149 を参照。(偈頌番号は *Medhātithi* の *Bhāṣya* の版本に従っている)。

⁴⁹ *Śrīkaṇṭhī* quoted in *Nityādisaṃgraha* f. 9r4–6 (v.): *śaukraṃ śukrād viniṣṛtam | vāmadevena kathitaṃ bhārgavasya hi hitaiṣiṇā | cakre dvādaśasāhasrī śaukrākhyā saṃhitā śubhā | mahāmantraṅgaṇākīrṇā sarahasā tu pārvati | yasyā ṛaṣṭāvṛtaṃbhūtaṃ devair ātmasamāih śubhaiḥ | vāmācāraratair devi brahmādyaiḥ koṭisaṃkhyayā*。

⁵⁰ = *Jayadrathayāmala*, *Śaṭka* 4 ff. 117v3–135v2. *Tantrāloka* 29.56–81 において要約されている。

に含まれている。残りの、不二の物質にほんの少しでも触れることさえも許さない諸マントラとして、シヴァ教シッダーンタ、ヴィシュヌ教、仏教のマントラ、ヴェーダのマントラ、バラモン教的礼拝のスマールタ *Smārta* の形態のマントラがリストアップされている。この情報は、このタントラにおいて、バイラヴァから女神に伝えられているが、〈不二の誓戒〉と〈二元的な誓戒〉、すなわち、バラモン教的な浄不浄の二元により制限されていない誓戒とその二元性の範囲内で行われる誓戒の違いについて、女神がバイラヴァに説明を要求したことへの返答として説かれる⁵¹。

4. すでに失われてしまった左流のタントラのうちの1つである『アーナンダシャーストラ *Ānandaśāstra*』の数詩節が、アビナヴァグプタ *Abhinavagupta* の『タントラーローカ *Tantrāloka*』での引用の形で知られている⁵²。これが実際にヴァーマの伝統に属する文献であることが、これらの引用の1つで述べられており⁵³、他の引用においては、シヴァをヴァーマ（／ヴァーマデーヴァ）⁵⁴として言及するときに示唆されている。アビナヴァグプタはこのヴァーマが当該の伝統のものであると証言している⁵⁵。アビナヴァグプタがこのテキストから引用する数節のうちの2つが特にここでは密接に関係している。最初の一節は以下の通りである。

10 *śrīmadānandaśāstrādaḥ proktaṃ ca paramaśīnā |*
ṛṣivākyam bahukleśam adhruvālpaphalaṃ mitam ||

⁵¹ *Mādhvakula* 4.44–51 (*Jayadrathayāmala*, Śaṭka 4, A f. 127v2–6) (T¹ = 4.44ab, 45cd, および 4.50–51 *Tantrāloka* *viveka* vol. 11 (Āhnikā 29), 52 頁所引, T² = *Tantrāloka* 29.73c–75b) における 4.44–51 の圧縮されたパラフレーズ)。

⁵² *Śrīkaṇṭhī, Srotobheda*, v. 264abc: *ānandākhyam saṃhitārtham lakṣagranthārthavistaram*. また, *Lakṣaṇasaṃgraha* 2.123c. アビナヴァグプタは *Tantrāloka* の以下の箇所で *Ānanda* を引用する。15.282, 15.590c–592, 15.601c–603, 16.65–68b, および 37.10–13b。

⁵³ *Tantrāloka* 37.11cd: *yad ārṣe pātahetūktam tad asmin vāmaśāsane ...* 「聖仙たちの教えにおいて罪であると説かれているものは、このヴァーマの教えにおいて、…」

⁵⁴ *Tantrāloka* 15.601c–602b: *śrīmadānandaśāstre ca kathitam paramaśīnā || nirapekṣaḥ prabhur vāmo na śuddhyā tatra kāraṇam*.

⁵⁵ *Mālinīśloka* *vārtika* 1.271c–274.

11 *naiva pramāṇayed vidvān śaivam evāgamam śrayet |*
yad ārṣe pātahetūktam tad asmin vāmaśāsane ||
12 *āsusiddhyai yataḥ sarvam ārṣam māyodarasthitam |*
yathā khageśvarībhāvanīḥśaṅkatvād viṣam vrajet ||
13 *kṣayam karmasthitis tadvad aśaṅkāḍ bhairavatvataḥ |*

Tantrāloka 37.10–13b.

最高の自在者が吉祥なる『アーナンダシャーストラ』その他において説いた、「ヴェーダの聖仙の教えは限定されている。それらは多くの不都合を伴い、それらが授けるだけの報酬も永続しない。賢者は絶対にそれらを自分の権威としてはならない。彼が受け入れるべき唯一の聖典はシヴァにより説かれたものである。かの聖仙たちの教えの中で罪であるとされているいかなるものも、このヴァーマの教えにおいては (*asmin vāmaśāsane*) 迅速に〔解脱を〕得るための手段 (*āsusiddhyai*) であると言われている⁵⁶。なぜならば、これら古の聖仙たちの教えは、未だ解脱していない者たちの世界の内にある (*māyodarasthitam*) からである。一度、[蛇たちの破壊者である] ガルダ *Garuḍa* と一体となり恐れがなくなることによって毒が効力をなくすように、一度、バイラヴァ *Bhairava* と一体となる境地を獲得すれば、[世俗的な宗教により課せられたすべての] 抑制より自由となり、[人を束縛に留める、その者の過去の] 行為の力が減するのである。」(『タントラーローカ』 37.10–13b)

第2の一節は以下の通りである。

śrīmadānandaśāstre ca kathitam parameṣṭhinā ||

⁵⁶ アビナヴァグプタがこの聖典を一字一句そのままに引用していることは、*pātahetūktam* に見られるパーニニのサンスクリット語からの逸脱により示されている。

602 *nirapekṣaḥ prabhur vāmo na śuddhyā tatra kāraṇam |*
devīrptir makhe raktamāṃsair no śaucayojanāt ||
 603 *dvijāntyajaiḥ samaṃ kāryā caryāntye 'pi marīcayaḥ |*
avikāraḥ tena vikalpān nirayo bhavet ||

Tantrāloka 15.601c–603.

603b *caryāntye 'pi* conj. : *carcyantepi* U : *carvantyepi* Z : *carcāntepi* W Ed.

そして、吉祥なる『アーナンダシャーストラ』において、ヴァーマの主は「世俗的な宗教の信奉者たちにより理解されているような個々人の利益に」関係なく活動するとシヴァは宣言している。[その宗教の観点からは] この[解脱の決定を] 決めるものは清浄さではない⁵⁷。彼らの礼拝において、女神たちを喜ばせるものは、血と肉[の供物]であり、[バラモンの] 清浄性の実践ではない。バラモンと最下層のカーストたちは共にチャルヤー (*caryā*) に従事すべきである。[なぜならば、私たちの感覚器官であるところの] 光り輝く神々 (*marīcayaḥ*) は、[無知な者たちの見解においては] 不可触民とされる者たちと接触する時さえも (*antye 'pi*)、その神々自身は否定的な反応を示すことはまったくない (*avikāraḥ*)。したがって、[ヴァーマにおいて入門者たちを] 地獄に導くのは、このことに疑問を呈することであり、[ヴァーマ・アーチャーラ (ヴァーマの実践 *vāmācāraḥ*) に伴うバラモンのタブーの毀損ではない]。

⁵⁷ 602b にある *śuddhyā* という語は、この一節もまた一字一句そのままに引用されていることを示している。ここで使用されているイディオム (*kim/na tatra kāraṇam*) では、当該語が語幹の拡張により (*-iṭ* → *-yā*) 非パーニニの主格単数となる必要があるからである。ここで例示されている語幹の拡張の他の事例については、Goudriaan and Schoterman 1988, 71–72 頁を参照。

バラモンと最下層のカーストたちとの交わりを含むチャルヤー *caryā* (行)⁵⁸ への言及からは、狂騒的な、カーストの混交したタントラの集会⁵⁹が確実に透けて見える。これは、ヴァーマの信奉者たちにより、あるいは少なくとも『アーナンダシャーストラ』のヴァーマの伝統の信奉者により実践されたヴァーマ・アーチャーラが、チャルヤークラマ *caryākramaḥ* (行次第) やラハスヤチャルヤー *rahasyacaryā* (秘密行)⁶⁰としても知られる、神聖化された性交の領域へと拡張していた明瞭なサインである。

5. ヴァーマにおいて反文化的な実践が存在していたことの明瞭な言及が、アビナヴァグプタが『マーリニーシュローカヴァールティカ *Mālinīśloka-vārtika*』において、ヴァーマ流の聖典の性格を説明する中に見られる。

śūnyānandāt prasṛtyaiva bodhaḥ procchalitātmakaḥ ||
286 *vartamāno nijāḥ śaktīr vikāśyaiva pravartate |*
yatrāśya pravivikṣāsti yataś ca prāvṛtad vibhuḥ ||
287 *sarvāḥ śaktīr asau bhāsvān svātmāny udrecya vartate |*
tataś cidātmako devo nyagbhūta iva bhāṣate ||
288 *udbhūtās tu vibhānty etāḥ pronmeṣecchāvidikriyāḥ |*

⁵⁸ 私は、*carcā* および *ante* どちらもここでは適切な意味をなさないため、KSTS 版および写本 W の *carcānte 'pi* という読みを *emend* している。 *kāryā* が先行することは、引き続き語が主語になる女性名詞であることを示しており、唯一同格かつ字形的に近い選択肢は *caryā* である。写本の読みにおいて、例えば以下のように、*rc* と *rv* の混同はよく見られる。 *paricarvitum* に対して *paricarcitum* (*Tantrāloka* 37.39d), *paricarvite* に対して *paricarcite* (*Mālinīśloka-vārtika* 2.45d)。また、*ry* → *rv* という誤りは、*Mālinīśloka-vārtika* 2.147cd の KSTS 版では *caryādyair* という正しい読みが採用されているのに対して (*āśramasthitacaryādyair jaṭājālāñjanāntakaiḥ*), J¹ および J² では *carvādyair* となっている。⁵⁹ このような集会の狂騒的な性格については、SANDERSON 2007, 281–288 を参照。

⁶⁰ 聖化された性交を意味する *caryākramaḥ* という術語の用法については、*Tantrāloka* 28.41 および *Tantrāloka-viveka* on 2.41, 3.68, 3.83, 3.84, 3.86–87, 3.89, 3.94, 3.95, 3.227, 3.228, 4.144, 5.121, 5.124 を参照。また、*Tantrāloka* 1.283 も参照。当該箇所では、カウラ Kaula の性的儀礼に関する、第 29 日課のトピックが *rahasyacaryā* 「秘密の警戒」としてリストに挙げられている。

ataś catuṣkayukto 'sau yady api pratibhāsatē ||

289 *tathāpi śaktigaṇanā vastuto 'sya bhavet kutaḥ |*

atraiva bhāvabhedāṃśanirmūlanakalā yataḥ ||

290 *sthitas tataḥ samācāro lokātikrāntagocaraḥ |*

Mālinīślokovārtika 1.285c–290b. K = ed. KAUL; H = ed. HANNEDER; MSS: J¹ f. 11v14–12r3; J² ff. 24v5–25r7.

285c *bodhaḥ* K H J¹ : *doṣaḥ* J² **286c** *pravivikṣā* K H : *pravivitsā* J¹ J² **287a** *bhāsvān* conj. : *bhāvaḥ* conj. H : *bhās tāḥ* J² K : *bhāvās tāḥ* (hypermetrical) J¹ **287b** *udrecya* K H : *udreṣya* J² : *udredhya* J¹ **288b** *vidi* K H : *vidhi* J¹ J² **288c** *catuṣkayukto* K H J² : *catuṣkagraṃtho* J¹ **289a** *tathāpi* K H J¹ : *tathā hi* J² **290a** *sthitas* K H J² : *sthitās* J¹

意識が「内向を」欠く歓喜より生じるやいなや、湧き上がりつつ、それは活動的な状態に入る。そこでは、意識はその内在する力を拡張させ、その状態に留める。その歓喜がそれ自身を浸透させ、そこからその歓喜が「今度は」生じた内的な我において、そのすべてに遍満する *太陽 (*bhāsvān* [conj.]) はその力を優勢にする。それゆえ、意識という神である、「これらの力を所有する」彼は、従属するかのようになり、その一方でこれらの「力は」、〈最初の拡張〉、〈認識前の故意性〉、〈意識〉、〈活動〉というように前面に出る。したがって、真実においては人は自分の諸々の力を数え尽くすことは絶対に有り得ないのであるが、「この様相においては、トゥンブルよりは彼の四姉妹を強調することで」彼はトゥンブルとして、「その四姉妹として具現する、〈最初の拡張〉、〈認識前の故意性〉、〈意識〉、〈活動〉という、この」4つの一組とともに顕現するのである。

この同じ「喜びに満ちた拡張の状態」の中では、「ヴェーダに権威に追従する未入門者たちが、私たちの世界の」諸実在が対象という属性であると想像する二元性の「すべての」側面を根

絶することに駆り立てるので⁶¹, [ヴァーマにおいて規定されている] 修練 (*samācāraḥ*) の領域は, 世俗的な社会規範を毀損するのである (*lokātikrāntagocaraḥ*) ⁶².

(『マーリニーシュローカヴァールティカ』 1.285c–290b)

上に引用した一節の最後でヴァーマの宗教的修練 (*samācāraḥ*) が世俗的な宗教の規定に従わないことを述べることで, アビナヴァグプタは *vāmācāraḥ* という用語の意味を暗黙のうちに説明している. すなわち, *vāmāḥ* (ヴァーマ) の様々な意味のなかで, ここで適用される意味が「反対の」「逆の」「～と正反の」「反対側の」(*pratikūlaḥ, pratīpaḥ, viparītaḥ*) ということを伝えている. したがってこの表現は, 世俗的な宗教 (*lokaḥ, laukiko dharmāḥ*) とは逆方向に行く (*vāmāḥ*) 宗教実践 (*ācāraḥ*) を意味し, その目的は, 飲食物や他者との交流における浄不浄という二元性をともなう妄想を付与されることで認識が貧弱化した状態から, 意識を自由にすることであると理解されるべきである. これは主として, 肉や酒の献供や消費, 入門者の交流におけるカースト区分の逸脱, 礼拝の過程での性交の実践にわたるものである. アビナヴァグプタは, どのような形態の反社会的な行為を四姉妹の信仰の入門信奉者のものとしているのかは語っていない. しかし, 彼が実際に述べることは性的な実践を強く示唆している.

svakautukakalālobhād ucchalaty eva yā citiḥ ||

277 saiva svabhāvarāgeṇa viśvaṃ rañjayate tataḥ |

⁶¹ Cf. *Tantrāloka* 4.243c–244a; 4.231c–232b, 4.244c–246b, 12.16c–23b, 15.593, 15.595–603c, および *Trīśikāvivaraṇa*, 266 頁 8 行–277 頁 7 行 (SANDERSON 2013b, 4–10 頁において校訂・英訳されている). 意識の外側にもろもろの性質の実在があり, その実在の命令, 許可, 禁止によりものに浄不浄の性質が帰属するという, パラモン教の外因主義については, SANDERSON 1985, 192–196 頁も参照.

⁶² パラモン教の権威に規定されている社会的規範を意味する術語としての *lokaḥ*「世界」に関しては, 例えば, *Mataṅgavṛtti* on *Vidyāpāda* 26.3, *Devāyāmata* A f. 1v3 (2.20ab), *Tantrāloka* 15.170, 同じく 4.244ab, *Tantrāloka* viveka on 4.251ab, および *Mataṅga, Caryāpāda* 1.32c を参照.

rakto hi rañjayed viśvaṃ raktiś cāśya svarūpataḥ ||
 278 *yaiva procchalitāvasthā svikārecchābharodayaḥ |*
tadraśmīsārasarvasve kṣaṇaṃ tiṣṭhann ananyadhīḥ ||
 279 *kiṃ nākarṣati kiṃ caiśa na bhāvayati yogavit |*
tata evocyate śāstre nārakto rañjayet ... ||

Mālinīślokaṽrtika 1.276c–279; K = ed. KAUL; H = ed. HANNEDER; MSS: J¹ f. 11r20–11v3; J² ff. 23v10–24r3.

276c *kalālobhād* conj. : *kalālokād* J¹ J² KH **276d** *ucchalaty eva* J² : *ucchalanty eva* J¹ (*ucchalaṃty eva*) KH **277b** *tataḥ* conj. : *yataḥ* J¹ J² KH **277c** *rakto* em. : *vyakto* J¹ J² KH **277d** *raktiś* em. *vyaktiś* J¹ J² KH **278b** *bharodaye* conj. : *bharodayaḥ* J¹ J² KH **278d** *tiṣṭhann* conj. : *tiṣṭhaty* J¹ J² KH. **279ab** *kiṃ caiśa na* conj. : *kiṃ naiśa na* J¹ J² (*kinnaiśa na*) K : *kiṃ naiśa ca* conj. H.

したがって、その同じ意識がその歡喜に満ちた遊戲の経験の熱望において湧き上がるときに、それは〔その意識がこの動きにおいて顕現させる〕世界にその意識自体に本来的に備わっている目覚めの状態を与えるのである。なぜならば、呼び起こされたときにその意識は〔それが顕現させる〕すべてを呼び覚ますのであり、そしてこの覚醒は〔意識の〕他ならぬ本質に応じて〔自発的に〕生じるのである。もし、包含と吸収の切望の最高の状態に没中している時に、この同じ最初の高揚の状態である光線の濃密な核において、たとえ一瞬でも認識が散乱していない状態に留まるのであれば、この瞑想の熟達者に自分に引き寄せることのできないものはなく、創造できないものはない。もし人が自分自身を覚醒させなければ〔他人を〕覚醒させることはできない、と聖典が説くのはこの理由による。

(『マーリニーシュローカヴァールティカ』 1.276c–279)

これに引き続き、〈性的快楽の本質 (*kāmatattvam*)〉⁶³の主題に関する謎めいた一偈があり、そのヴァリエーションは、第3の半偈に関してシャクタのシヴァ教の『ヴァーマケーシュヴァリーマタ *Vāmakeśvarīmata*』に見いだせる。カシミールの注釈者ジャヤラタ Jayaratha は、その半偈を性的に引き付けることを目的とした瞑想の教えであると注釈している⁶⁴。〈性的快楽の本質 (*kāmatattvam*)〉の主題は、アビナヴァグプタにより『タントラーローカ』でも取り上げられている⁶⁵。そこでの論述に対しては、同じ注釈者が長く、引用が豊富な説明をしており、それによれば、この実践の性的な性質について何の疑いも残らない。しかしながら、ここでアビナヴァグプタは彼の論考を以下のように締めており、それ以上明確にはしていない。

tattvasya kāmatattvasya prakāṭikriyayā kṛtam ||

285 *siddhācakraṣv idaṃ gopyaṃ kiṃ vā na prakāṭikṛtam |*

Mālinīślokaavṛtika 1.284c–285b; K = ed. KAUL; H = ed. HANNEDER; MSS: J¹ f. 11v12–14; J² ff. 24v2–5.

284d *kṛtam* conj. : *yataḥ* J¹ J² K H 285a *siddhācakraṣv idaṃ* conj. : *siddhacakraṣv idaṃ* J¹ J² K H.

〈性的快楽の本質 (*kāmatattvam*)〉の性格をここで明らかにすることは十分である。これは、成就したヨーギニーたちの集まりの中で秘密にされておくべきものである⁶⁶。あるいは、私はそれをすでに明らかにしなかったであろうか？

⁶³ *Mālinīślokaavṛtika* 1.279d²–280: **tathā || kāmasthaṃ* (conj. : *iti || tathā: kāmasthaṃ* J¹ J² K H) *kāmamadyasthaṃ kāmāṅkuśapuṭikṛtam | kāmēna sādhaḥayet *kāmaṃ* (em. [= *Vāmakeśvarīmata* 4.46a] : *kāmān* J¹ J² K H) *kāmaṃ kāmēṣu yojayet* 「彼は Kāma にあり、Kāma の中心にあり、Kāma の鉤に抱かれた Kāma を Kāma をもって完成させるべきである。彼はもろもろの Kāma に Kāma を挿入するべきである。」

⁶⁴ *Vāmakeśvarīmata*, ed. KAUL 1945, 4.45c–46.

⁶⁵ *Tantrāloka* 3.146–148b.

⁶⁶ *Mālinīślokaavṛtika* 1.159a (*ity alaṃ khecarīcakraḥṣṭhyālāpeṇa bhūyasā*) に見られる近接した平行箇所参照して、私は男性の *siddha*-の代わりに女性の *siddhā*- (= *siddhayoginī*) を推定 conjecture した。

「バイラヴァタントラ」の不在と四姉妹のタントラの最盛期

したがって、ダルマキールティとシャークヤブッディが7世紀に — おそらくダルマキールティの場合は早ければ6世紀の後半に — 目にしたタントラの宗教形態は、いまだ反文化的な実践のない仏教タントラの伝統 — 『不空罽索神変真言経』などの観音を中心としたタントラ文献群が思い浮かべられる — と、主としてシッダーンタと「バギニータントラ／ヴァーマタントラ」からなるタントラのシヴァ教からなるものであった見て良い。「ダーキニータントラ」に関しては、その実践が『ピチュマタ *Picumata*』や『ジャヤッドラタヤーマラ *Jayadrathayāmala*』などのメジャーなタントラ文献に証拠があるように、ヨーギニー信仰を説く文献に持ち込まれたことは十分に明らかであるにもかかわらず、影響力という点でこれら2つに比すべき伝統であったかは疑わしい。実際には、「ダーキニータントラ」の流行よりもそのセンセーショナルな性格が、ダルマキールティやムスリムの比較宗教学のパイオニア — もし彼らの言うところの人身供犠を行うダフキニーヤ／タフキニヤ／ダンカニアが本当にこの伝統のセクトであったか、あるいはそのようであると考えられるのであるならば — の注意を引いたことの説明になると思われる。そのセンセーショナルな性格はまた、説話文学、神話、伝説的な歴史のなかに人間を食べるタントラのヨーギニーたちの集会の話が顕著に見られることの説明にもなるであろう。

ここで、注釈文献の研究からシヴァ教の知識を得ている人は誰でも、ダルマキールティとシャークヤブッディ、そして『ニシュヴァーサカーリカー』のどちらもが「バイラヴァタントラ」に言及していないことに気づくかも知れない。この「バイラヴァタントラ」は、五分法では「ダクシナタントラ」、すなわち「右のタントラ」あるいは「南のタントラ」として知られており、サーダーシヴァの右あるいは南を向いているアゴーラ *Aghora* の顔に関連付けられている。なぜならば、その文献が制作された時 — それはまた、シヴァ教の聖典の現存する最初期の写本群の時代でもあるが —

シヴァ教には2つの重心があった。その1つはシッダーンタであり、その大部分において、バラモン社会のタブーを避けることでその社会に受け入れられることを模索した。もう一方が「バイラヴァタントラ」であり、強力に反文化的であり、それらのタブーを破ることを主張し、カーパーリカ（髑髏派）たちのタントラ以前の伝統を持ち込み、精巧にした。もしダルマキールティ自身が「バイラヴァタントラ」のことを知っていたならば、彼は「バギニータントラ」とともに、あるいはその代わりにそれを引用したと予想される。なぜならば、それが、マントラの体系の効果は、それらの規定で要求されている行為の道徳的清浄さには依らないという彼の議論の、もっとも有無を言わさぬ説明となるからである。もちろん、彼がその存在を知ってはいたが、*ḍākinībhaḡinītantrādiṣu*（「ダーキニータントラ」、「バギニータントラ」、その他の同様〔の諸体系〕において）という語の-*ādi*（～など）という語で「バイラヴァタントラ」に言及すれば十分であると考えた可能性もある。しかし、シャークヤブッディが「バイラヴァタントラ」について言及していないことは、より一層事実を物語っている。なぜならば、彼は、ダルマキールティが名前を述べていない「その他の同様〔の諸体系〕」(-*ādiṣu*)を取り上げているからである。もし彼が「ダクシナ（右タントラ／南タントラ）」を知っていたならば、彼は確実に当該箇所では知られない「カンブキニータントラ」よりもそれに言及していたであろう。

それゆえ、私は以下の様な説を唱えたい。ダルマキールティ、シャークヤブッディ、そして『ニシュヴァーサカーリカー』の時代に「バイラヴァタントラ」は未だ出現していなかった、少なくともシッダーンタや「バギニータントラ」とは別の、そしてそれらより勝れたマントラマールガの独立した支分としてそれ自身を称揚するところまで到達していなかった。また、その時代には、それぞれがサダーシヴァの5つの顔から放出されるものである、マントラマールガの5つの聖典の流れへの分類は未だ流行しておらず、結果として2人の仏教の著者と『ニシュヴァーサカーリカー』は四姉妹のタントラを「バギニータントラ」としてのみ知っており、「ヴァーマタントラ」として

は知らなかったことになる。なぜならば、それはバイラヴァのカテゴリーが「右」(*dakṣiṇam*)として登場して始めて、「左」(*vāmam*)になったからである。

この研究の次の段階で、私は「バイラヴァタントラ」が優勢になる以前、まだ日陰の存在になっていない「バギニータントラ」がシッダーンタのシヴァ教とともに、インド亜大陸とヒンドゥー化された東南アジアを通じてメジャーな伝統であったという証拠を提示する。この成功に対する仏教側の反応として、仏教ヴァージョンのトゥンブルと四姉妹の信仰を作り出し、彼らの仏教への服従と改宗の神話を備えることを見るであろう。しかしながら、発展する仏教タントラの伝統が、この過程で「バギニータントラ」の〈左の実践〉を取り入れることはなかったようである。「バイラヴァタントラ」、より特定するならば、女神に焦点を置いた「ヴィドゥヤーピータ *Vidyāpīṭha*」の諸伝統の興起に伴い、高潔な仏教マントラの諸体系を反文化的なシヴァ教のマントラの諸体系から隔ているダルマキールティのバリアは、すぐに損なわれ、取り払われてしまうのである。

一次資料からの引用

Kathāsaritsāgara of Somadevabhaṭṭa. Ed. Durgāprasād and Kāśināth Pāṇḍurang Parab. 4th ed., revised by Vāsudev Laxmaṇ Śāstrī Paṇṣīkar. Bombay, 1930.

Kubjikāmata. → GOUDRIAAN and SCHOTERMAN 1988.

Jayadrathayāmala, Ṣaṭka 1. NAK MS 3-358, NGMPP A 995/6–996/1: palm-leaf; Pāla script.

Jayadrathayāmala, Ṣaṭka 2. NAK MS 5-4650, NGMPP B 153/3: paper; Nepalese Devanāgarī; 1925 CE.

Jayadrathayāmala, Ṣaṭka 4. NAK MS 1-1468, NGMPP B 122/4: paper; Newari script; ad 1626/7.

Tantrāloka of Abhinavagupta, with Jayaratha's *Tantrālokaivēka*. Ed. Mukund

- Rām Śāstrī. KSTS 23, 28, 30, 35, 29, 41, 47, 59, 52, 57, 58. Bombay-Srinagar. 1918–38. Mss: U = BORI 449 of 1875–76; paper; Śāradā; W = ORLS 1054 iii (*Tantrāloka* without -*viveka*); paper; Śāradā; Z = ORLS 1792; paper; Śāradā.
- Trīśikāvivaraṇa*. = *Parātrimśikātattvavivaraṇa*. → GNOLI 1985.
- Devyāmata*. Ms: NAK 1-278 (NGMPP A41/5); palm-leaf; Nepalese script; 1060 CE.
- Nityādisaṃgraha* of Rājānaka Takṣakavarta. Mss: A = Pune, BORI MS 76 of 1875–76; paper; Śāradā script; B = Oxford, Bodleian Library, Stein MS Or. d. 43; paper; Śāradā.
- Nīśvāsakārikā*. Mss: A = IFP T. 17A; B = IFP T.150.
- Netra* = *Netratantra*, with Kṣemarāja's *Netroddyota*. Ed. M. Kaul. KSTS 46 and 61. Bombay, 1926 and 1939.
- Picumata*. Ms: NAK MS 3-370, NGMPP A 42/6; palm-leaf; Nepalese script; A.D. 1052.
- Pramāṇavārtikaṭīkā* (Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel bshad) of Śākyabuddhi. D = Derge Bstan-'gyur, Tshad ma no. 4229, vol. 3 Je 1b–328a7, vol. 4, Ñe 1–282a; P = Peking Bstan-'gyur, vol. 131, no. 5718 Je 1b1–Ñe 348a8.
- Pramāṇavārtikasvavṛtti* of Dharmakīrti. Ed. Raniero Gnoli. Rome, 1960.
- Pramāṇavārtikasvavṛtti* of Dharmakīrti. Ed. Dalsukh Bhai Malvania. Varanasi, 1959.
- Pramāṇavārtikasvavṛttiṭīkā* of Karṇakagomin. Ed. Rāhula Sāṅkṛtyāyana. Allahabad, 1943.
- Bṛhatkathāmañjarī* of Kṣemendra. Ed. Śivadatta and Kāśīnāth Pāṇḍuraṅg Parab. Bombay, 1901.
- Manusmṛti* with Medhātithi's *Bhāṣya*. Ed. Gaṅgānāth Jhā. 3 vols. Calcutta, 1932 (vol. 1), 1939 (vol. 2–3).
- Mataṅga* with Bhaṭṭa Rāmakaṇṭha's *Vṛtti*. Ed. N. R. Bhatt. 2 vols. Pondicherry,

- 1977 (*Vidyāpāda*) and 1982 (*Kriyāpāda*, *Yogapāda* and *Caryāpāda*).
Mahānayaprakāśa (Old Kashmiri) with a Sanskrit commentary. Ed. Mukund Rāma Śāstrī. KSTS 21. Bombay, 1918.
- Mālinīślokaṣvartika* of Abhinavagupta. Ed. M. Kaul (as *Mālinīvijayavārtika*). KSTS 32. Srinagar, 1921 (K); ed. HANNEDER 1998 (H). Mss: J¹ and J² = Jammu, Raghunatha Temple Library, MS no. 20, ka-2 and MS no. 1638 ka; both paper, both in Devanāgarī script, the second dated in 1789 CE.
- Lakṣaṇasaṃgraha* = *Pratiṣṭhālakṣaṇasārasamuccaya* of Vairocana. Ed. Dāmodaraśarman and Bābukṣaśarman. 2 parts. Kathmandu, 1966 and 1968.
- Vajradāka* = *Vajradākamahātantra*. 東京大学図書館所蔵、『松濤カタログ』no. 342. 貝葉. ネワール文字. 西暦 1171 年.
- Vīṇāśikha*. → GOUDRIAAN 1985. Ms: A = NAK MS 1-1076 (NGMPP A43/3).
- Śrīkaṇṭhī* (*!Śrīkaṇṭhasaṃhitā*): この聖典の、シヴァ教その他の正典 (*śrotobhedah*) のリストを挙げる章は、ダイジェストである *Nityādisaṃgraha* (参照) に含まれている。当該章の写本 B からの転写は HANNEDER 1998, 240–268 頁.
- Saṅghabhedavastu*: *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādins*, ed. Raniero Gnoli with the assistance of T. Venkatacharya. 2 Parts. Serie Orientale Roma, 49. Rome: Istituto Italiano per il Medio e Estremo Oriente. 1977–1979.
- Sarvathāgatattvasaṃgraha*. 堀内寛仁. 1983. 『梵藏漢対照初会金剛頂経の研究：梵本校訂篇上 — 金剛界品・降三世品』高野山・密教文化研究所. 同. 1974. 『梵藏漢対照初会金剛頂経の研究：梵本校訂篇下 — 遍調伏品・義成就品・教理分』高野山・密教文化研究所.
- Siddhayogeśvarīmata*. → TÖRZSÖK 1999. Ms: Asiatic Society of Bengal 5465 (G); paper; Nepalese script; 1672/3 CE.

Svacchanda = *Svacchandatantra* with Kṣemarāja's *Svacchandoddyota* Ed. M. Kaul. KSTS 31, 38, 44, 48, 51, 53, 56. Bombay, 1921–35.
Svāyambhuvasūtrasaṃgraha. N = National Archives, Kathmandu, ms 1.348 (NGMPP A30/6); palm-leaf; Nepalese script; undated; M = Ed. Veṅkaṭa-subrahmaṇyaśāstrī, Mysore, 1937; F = Ed. Filliozat, 1994.

二次資料および略号

- BALCEROWICZ, Piotr. On the Relative Chronology of Dharmakīrti and Samantabhadra. *Journal of Indian Philosophy* 44, pp. 437–483.
- BORI = Bhandarkar Oriental Research Institute.
- DAVIDSON, Ronald M. 1981. The Litany of Names of Mañjuśrī. Text and Translation of the Mañjuśrīnāmasaṃgīti. In *Tantric and Taoist Studies in Honour of R.A. Stein*, ed. Michel Strickmann, vol. 1, pp. 1–69.
- DELEANU, Florin. 2019. Dating with Procrustes: Early Pramāṇavāda Chronology Revisited. *Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies* 2, pp. 11–47.
- FRAUWALLNER, E. 1961. Landmarks in the History of Indian Logic. *WZKSOA* 5, pp. 125–148.
- GNOLI, Raniero. 1985. *Il commento di Abhinavagupta alla Parātriṃśikā (Parātriṃśikātattvavivaraṇam) : traduzione e testo*. Rome: : Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- GOODALL, Dominic, Shaman Hatley, Harunaga Isaacson, and Srilata Raman eds. 2020. *Śaivism and the Tantric Traditions: Essays in Honour of Alexis G. J. S. Sanderson*. Leiden and Boston: Brill.
- GOUDRIAAN, Teun. Ed., tr. 1985. *The Vīṇāśikhatantra: A Śaiva Tantra of the Left Current*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- GOUDRIAAN, T. and J. A. SCHOTERMAN. 1988. *Kubjikāmatatantra. Kulālikā-*

- mnāya Version. Critical Edition.* Leiden: Brill.
- HANNEDER, Jürgen. 1998. *Abhinavagupta's Theory of Revelation. An Edition and Annotated Translation of Mālinīśloka-vārttika 1, 1–399.* Groningen: Egbert Forsten.
- Hôbôgirin. Dictionnaire encyclopédique du Bouddhisme d'après les sources chinoises et japonaises.* 8 vols. Tokyo: Maison franco-japonaise, 1929–2003.
- IFI = L'Institut Français d'Indologie. IFP = L'Institut Français de Pondichéry.
- IHARA, Shoren. 1998. Ed. *The Sanskrit Commentaries on the Pramāṇa-vārttikam from the Rāhula Sāṅkṛtyāyana's Collection of Negatives. II Sanskrit Manuscripts of Karṇakagomin's Pramāṇavārttika(sva)vṛttiṭīkā. Facsimile Edition.* Patna and Narita: Bihar Research Society and Narita Institute for Buddhist Studies.
- INAMI, M., K. MATSUDA, and T. TANI. 1992. *A Study of the Pramāṇa-vārttikaṭīkā by Śākyabuddhi from the National Archives Collection, Kathmandu. Part 1: Sanskrit Fragments Transcribed.* Studia Tibetica No. 23. Tokyo.
- IYANAGA, Nobumi. 1983. Article “Daijizaiten” In *Hôbôgirin*, pp. 713a–765b.
- . 1985. Récits de la soumission de Maheśvara par Trailokyavijaya, d'après les sources chinoises et japonaises. In *Tantric and Taoist Studies in Honour of R. A. Stein*, vol. 3, pp. 633–745.
- KATAOKA, Kei. 2021. Bhāviveka and Kumārila on Omniscience and Scripture: Reconsidering the New Chronology. In *A Road Less Traveled. Felicitation Volume in Honor of John Taber*, ed. Vincent Eltschinger, Birgit Kellner, Ethan Mills and Isabelle Ratié (Vienna: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, 2021), pp. 279–299.
- KRASSER, Helmut. 2011. Bhāviveka, Dharmakīrti and Kumārila. 船山徹 (編) 2011. 『中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性』 科研報告書基盤研究 (B) 所収, 193–242 頁.

KSTS = Kashmir Series of Texts and Studies.

LAWRENCE, Bruce B. 1976. *Shahrastānī on the Indian Religions*. The Hague, Paris: Mouton.

MEISTER, Michael W. 1984. Ed. *Discourses on Śiva*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.

NAK = National Archives of Nepal, Kathmandu.

NGMPP = Nepal-German Manuscript Preservation Project Reel number.

ORLS = Oriental Research Library, Srinagar.

SANDERSON, Alexis. For details of publications cited here with dates up to 2019 see GOODALL et al. 2020, pp. xxxi–xxxiv (<<https://brill.com/display/book/9789004432802/front-10.xml>). Lecture Handouts cited here can be downloaded from academia.edu: 2009b ‘Tantric Śaivism and Caste’; 2013b ‘Abhinavagupta on the Subjective Nature of Brahmanical Values: Śākta Fundamentalism Against the Absorption of Śaivism into ‘Hinduism’; and 2018 ‘The Śākta Transformation of Śaivism’.

T. = *Taishō shinshū Daizōkyō*; T. after IFP = Devanāgarī transcript of a manuscript.

THOSAR, H. S. 1980. Āmardaka through the Inscriptions. *Journal of the Epigraphical Society of India* 7, pp. 44–47.

TILLEMANS, Tom J. F. 2000. *Dharmakīrti's Pramāṇavārttika: an annotated translation of the fourth chapter (parārthānumāna)*. Vol. 1 (k. 1–148). Vienna: Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

TÖRZSÖK, Judit. 1999. The Doctrine of Magical Female Spirits. A critical edition of selected chapters of the *Siddhayogeśvarīmata(tantra)* with annotated translation and analysis. D.Phil thesis, University of Oxford, Faculty of Oriental Studies.

VETTER, Tilmann. 1964. *Erkenntnisprobleme bei Dharmakīrti*. Vienna: Hermann Böhlau.

WAKAHARA, Yusho (若原雄昭). 1988. 「マントラの効果と全知者：Pramāṇa-vārttikasvavṛtti 研究 (1)(vv.292-311)」『仏教史学研究』31(1), 1-30 頁.

<キーワード> 仏教のタントラ化, シヴァ教, ダルマキールティ, ダーキニータントラ, バギニータントラ

翻訳に関する注記

- 本論文は『密教学研究』56（2024年3月発行，横組1-34頁）に収められた，Alexis Sanderson 教授の論文“The Role of Śaivism in the Tantric Transformation of Buddhism: 1. Tantric Traditions in the Time of Dharmakīrti and Śākyabuddhi”の和訳である．
- 本文中にサンスクリット語の原語で表記されている語に関しては，原則としてその音写のカタカナで記述したのち，当該サンスクリット語を添えている．その場合，訳者により丸括弧内に，暫定的な和訳を示している場合がある．
- 必要に応じて訳者の注記が添えられている．
- 「バギニータントラ」など特定の聖典群を示す語は「 」で括っている．また，専門用語あるいは熟語として提示する語は〈 〉で括っている．
- 参考文献は，元論文のものをそのまま掲載し，日本語による出版物に関しては，日本語原題を提示している．
- 論文末尾のキーワードは訳者が付したものである．